

「名譽？」と前崎は冷やかに受けて。

「名譽を主張する者は偽名なんかせんよ。君は天津風之助といふ出鱈目の

聖なる競技會に入つて居るではないか。それで今更名譽も不名譽も有るかッ」と老

「然り〜」と他は野次り出した。

「併し、電氣を利用したなんて、そんな事は斷じて無い、先づそれから調べて貰つて、其上で再び摸型を飛行させて見せやう。其結果で、手品で無い事が分つたら、初めて僕は偽名の罪を謝さう」と秀之助は言張るのである。

「グズ〜言ふな。そんな事を言つて油断をさして、貴様、逃げる氣なんだらう」

「さア諸君。不徳漢に制裁を加へ様ぢやアないか」

「替成々々、大いに遣るべし」

一等賞の取れぬ腹癒せから、卑劣にも亂暴にも、大勢一度に打つて掛る。

素より秀之助は唯一人、彼等に敵すべくも無い。袋叩きに成らうとする處へ、矢來の竹を押

破り、段々幕を跳退けて、場外より飛込んで來た一壯夫。

「冒險男兒松倉團彌此所に有り！友の急に馳せ向ふたり。片ツ端から撲り殺すぞッ」

秀之助は松倉が來たので、やれ嬉しやと思ふ油断に、誰が打下したか、鐵拳に後頭部を強くやられて。

「あッ」と叫んだ儘其所へ倒れた。

松倉は此體を見て益々狂氣の如く成り、杉丸太を振舞はして打散らす。

續いて入來つた壽男は、手當り次第に小石を取つて抛つので、之は溜らぬと皆散亂する……

園遊會は滅茶々々である。

倒れた秀之助は起き上つたが、眼が眩んで如何も成らぬ。

「さア此間に、兎も角も退却……」と松倉は秀之助の手を取つて走らうとしたが、敵役の大

勢は遠巻にして道をふさぎ、今度は四方八方から礫打に仕ようと取圍む。

『六三』

いくら松倉が暴れても多勢には敵し難い。一時は威勢も好かつたが、何分遠巻に包圍されて石合戦と成つては、退却の他は無い。

秀之助と壽男とは、石に當つて二三ヶ所の負傷さへ生じた。迂闊々々して居ると殺されぬと

も限らぬ。

斯ういふ混乱の場合に一命を失つては何んにも成らぬ。重傷を負うても尻の持つて行き處が無い。

發明の成功する迄は千萬金にも換へ難い秀之助の命である。少しも早く一方を突切つてと、松倉も壽男も心を急らすが、扱て如何しても血路が見出されぬ。

然う斯うして居る間に警官が來さうである。理非を論じる場合には、最初喧嘩を吹き掛けた前崎等が悪いのは分つて居るが、兎も角も貴紳の參集して居る園遊會場を混乱せしめたのは良くないので、巡查の手に掛つたら此方が不利益と分つて居る。

「仕方が無い、川へ逃げませう。さア早く川の中へ！」と壽男が叫んだ。

「川へ？然うだ、川へ飛込ふ！」と松倉は直ぐ賛成した。

秀之助もそれに従ふより他には無い。

三人揃つて玉川へ飛込ふとする。それを見て取つた會員等は。
「それ、川の方へ逃げるぞ！」
「水中でマゴ／＼して居る處を狙つて、石を投げろッ」

「向岸へ着かせぬ様に先廻りをしろッ」

「深い方へ追遣つて沈めて了へッ」
口々に呼はる。

此時、川上から水流の急に棹の力を加へて、箭の如く疾く下つて來た一隻の鮎漁船。粗末な屋根を張つて、紅白の幕が垂れてあるが、中は空で、誰も乗つて居らぬ。

如何したのかと見ると、棹を突張つて居るのは……怪少女のお登女である。

「あッ、好い處へお登女さん！」と秀之助は呼掛けた。

「好いも悪いも無いわ。妾、加勢に來たのよ。さア早く、さア／＼早く。これへ乗つてお逃げなさいよ」とお登女は言ふ。

言ふにや及ぶ、三人は急いで船へ飛乗つた。

此處へ石礮は雨霰の如く飛んで來るが、屋根や幕で巧く避けられて、中の人には當らぬ。唯艦に立つて水刺棹を突張るお登女の方には、大分危ないのが飛來つたが、巧に棹で彈き返しつ急いで川下へと突流す。

「お登女さん危ない、僕が代らう」と松倉が出掛けるを。

「お止なさいよ、お前さんの様な人には屹と當るわ。妾なら當りさうでも避けてよ。それに棹の張り方も知らないでしよ。そら、斯うして此方の瀬に船を向けると、すつと岸から遠く成るのよ。あれ〜岸づたひに追うて來るのも有るわね。走馬燈籠見た様で面白い事」とお登女はメーリーゴラウンドに乗つた様な氣で居る。

いつもながら、キビ〜して居るお登女。何如して此急を救ふのに間に合つたか。

「六四」

急流に棹を張る船と、河原の砂利の上を踏む人の歩みとは、速度に於て大分の差を生じて來る。それに水筋が大曲りして、北の岸から次第に離れて行くので、追手の追付けぬのは勿論、礫の石も達しなく成つた。

「既う好いから、松倉さん、代つて下さいな」と言ひつゝ。お登女は棹の手で留めた。

「好し。僕が遣らう。棹は三年、櫓は三月だつてえが、何、僕にだつて遣れるよ」と言ひつゝ、松倉が屋根の下から出て來た。

「能書は好いわ。それより蛇籠や古杭へ乗上げない様に、氣をお着けなさいよ。それから、下

手を遣ると棹が砂利の間から抜けなくつて、それに引かれて川の中へ落ちますよ。淺くつて死ぬまでには無いでせうが濡れちや寒いわ」と言ひつゝ、屋根の下へお登女は入つて一息した。中では秀之助と澤男とが、未だ息切れの苦しさに顔の蒼さも回らずに居る。

「怪我は無くつて？石の當つた處は、どんなんですか」とお登女は優しくも問ひ掛ける。

「なに、少し位、大した事は有りません」と秀之助は答へたが、それでも肩や脊の痛みに、つゝ顔を凝めるのである。

「何しろ船の中では仕方が有りませんわ。何處かへ上つて手宛を仕ませうね」

「いえ、それ程の事は……併し、まアお登女さん、如何して此船で救ひに來て下さつたのですか。これが本統の救世の船ですね」

澤男も亦口を開いて。

「お登女さんが來て下さらないと、我々は川の中で、どんなに成つたか仕れないのでした。能く助けに來て下さいました」

棹を張りながら松倉も。

「全體、如何したんですか、お登女さんは……」

お登女は昵と秀之助の顔を見て。

「妾ねえ、あれからがんがら婆アの處へ連れて行かれて、一足も外へ出られないで居たんですよ。然うすると新聞に今日の事が出て居るでせう。屹と天津風之助といふ名が貴郎でせうと思つたもんですから、見物に来たくつて仕様が無かつたんですよ。それを如何しても婆アさんが許さないんでしょう。妾、困つて了つたんですよ。然うして妾を柱へ縛り付けて了つたもんですから、いよく如何する事も出来ませんわ。仕方が無いから、妾、空癪を起して苦しんで見せたところが、婆アさん、これには驚いて、それ水天宮様の御符だのお醫者だのと、大騒ぎ始めた處で、ヤツと逃出して来たんですが……玉川へ来て見ると、あの騒ぎでせう。突然川狩の船を引ッ張り出して、好く救ふ事が出来たのですが、船の持主は吃驚して居るでせう。船代を置いてやりたいのですが、妾は然ういふ風で出て来たので、いくらも持つて居ませんわ」
「いや、金は砂金を賣つて得たのが未だ有ります。五圓も置いといたら好いでせう」
「それで澤山です。座板の間にも挟んで置けば、今に船を拾ひに来るでせう。扱て妾達は、何時までも、船で下ツたつて仕方が無いわ。好い加減の處へ上りませう。松倉さん、何處かへお着けなさいな」

松倉は相變らず棹を張りながら。

「既う九子が近い。黒く繁つて居る山は龜甲山だな」

「其下へお着けなさいよ」とお登女は言ふ。

「心得た。既う一息だ」と松倉の棹の手には、取つて置きの方が加はつた。

『六五』

九子近く成つて船を留め、龜甲山の下から岸に上つた秀之助等四人は、それから又用水の流れを石橋渡つて越して、高い石段を登つて龜甲山の中に分入つた。

「既う此處まで追つては來ないでせう。來れば船の持主だが、それもお金が置いて有るから文句は無いでせう」とお登女は木の根に腰を掛けながら言ふ。

「や、何しろ非常に疲勞した。力を入れて競技を見物した揚句が彼の大奮闘、それからが急流下りで、流石の冒險男兒も腹が空つた。茲に於て僕は白狀する。平常口癖の養成を唱へて居たが、實際は如何も口程に無いね。眞に膽力の養成が出来て居る。喧嘩の最中に、摸擬店へ飛込んで、何か食物を懐中へ捻込んで來るんだつたよ」

「か何かねえ」と松倉は相變らず面白い事を言ふ。

「いや、あんな騒ぎを惹き起したのは、如何も大城令嬢の細工らしい。何か僕の事を競技者向つて、悪く吹き込んだのに相違あるまい」と秀之助は思ひ當つて言ふ。

「何んにしても、喧嘩は喧嘩だ。賞金は賞金だ。立派に成功したんだから、翌日にでも僕が代理として、受取に行つて来よう」と松倉は言ふ。

「いや、それは恐らく駄目だらう。僕が偽名して行つたといふ點を以て、必らず苦情を附けるに相違ないよ」

「だつて、見す〜一萬圓……確かに優等で、各競技に成功したのに、賞金を寄越さんといふ法は無い。名前で飛行したのでは無いんだから……」

「此方は然う思つても、向ふで然う解釋しなければ、何んにも成らない」

「だつて見す〜一萬圓！それさへ有れば發動機が買へて……いよ〜正式の飛行試験が出て来るんだがなア」と松倉は残念がる。

お登女は此時、屹と思案を定めて。

「そんな苦情の附く賞金なんて、打棄つてお置きなさいよ」

「だつて一萬圓ですせ」と松倉は言ふ。

「一萬圓だつて二萬圓だつて、好いちやア有りませんか、大城銀十郎なんて人が副會頭になつて居る、そんな會から貰はなくつても、發動機を買う位は、如何にでも成りますよ」

「ぢやア雲出谷の、あの、唐櫃、残りの分を引出して呉れるんですか」

「あれは、いつかも言つたでしょ。小出しの分よ。他に澤山砂金を産出する處を妾はチャンと知つてるんですから……」

「其所を致へて呉れ給ふか」

松倉が思はず乗出すと、掛けて居た腰が木の根から脱れて、ペツたりと尻餅。

此時壽男は。

「あッ大變だ、大勢来たッ」と叫んだ。

吃驚して皆立上つた。

木の間から山の下を見ると、向鉢巻、捻鉢巻、棒や杵を持つた大男が十四五人。

お登女は目敏く見出して。

「あッが、から婆アさんが先きに立つて居るわ」と叫んだ。

「何の目的で来たんだらう」と秀之助は疑念に耐えぬ。
 「敵だらうか。味方だらうか」と松倉も首を傾ける。
 「分つてますわ。妾には分つてるわ。本統に困つて了うねえ」とお登女は今までの活氣急に消えて、打萎れながら言ふ。

「あッ、石段を此方へ登つて来るわ」と壽男が見て小聲の報告。

「六六」

お登女は舌打を強くして。

「ちよッ仕様が無いわ。又がんがら婆が来やアがッた。これから裏山へ逃込めば捕まりッ子は無いのだけれど、妾は未だ話があるのよ。一寸隠れますからね、好い加減に胡麻化して早く追歸して下さいよ」と言放つて、得意の木登り。此手練は影澤の官林で松倉は既に認知して居る秀之助兄弟は初めていある。吃驚して見て居る間にお登女は樹の大木に、すらくと登つて枝の繁りにか、樹の洞にか、忽ち妾は見えず成つた。

其所へがんがら婆を先きに立つて、石段を大勢登つて来た。

此方の三人は澄まして居ると、婆さん直ちに口を切つて。

「やア、見當通り此山に居たね。お前さん達、心配する事は無いよ。妾達は敵ぢやア無い、味方をしに来たんだよ。家のお登女が飛出したから、後を追掛けて来て見ると、玉川で大喧嘩の最中。あの兒は全く豪いやねえ。船を早速に曳き出して、それへお前さん達を救つて川を下つて引揚げるなんて、妾は益々氣に入つたんだよ。それから妾は直と砂利取場へ行つて、さア皆来いと一聲掛けたら、これだけ直と集つて呉れたんだよ。何を置いても妾の爲に加勢に来て呉れるのが頼母しいぢやアないか。それから妾は團遊會の中へ暴れ込んで、散々痰火を切つて、ついと引上げの、砂利船に皆んな乗つてお前さん達の後を追うて来たんだがね。此下に川船が繋いで有つたので、ぢやア既う此山で一休みしてるに違えねえと、見當附けて上つて来たんだよ。喧嘩は既うお了ひだ。向ふから逆も追うては来まいよ」と汗を拭き、辯じ立てた。

「大きに御苦勞でした。感謝々々」と松倉はそれに禮を述べた。

「それで、あの娘は如何しました」と婆さんキョロ／＼眼で問掛けた。

「最少し先き迄居たんですが。えゝと其急用が有るてんで……居なくなつたです」
 「申慮でせう。そんな筈は無いわ」

「でも居なく成つたんで……」
「他の者なら然うですかッて、素直に引下るか知れないが、憚りながら十二社のお辰だよ。子供だましに乗るもんかね。縛られたのを胡麻化して、振解いて玉川まで飛出したお登女ですよ。其所の若い人に餘ッ程深い關係が無くッちやア成らない譯さね。其關係の深い人を振切つて他へ行く程の急用が、あの娘に有る筈が無いわ。是は適切妾の登つて来るのを見て、何處かへお前さん達で隠したんだね」

「そ、そんな事が……」

「いゝえ然うです。然うに違ひない」

「だッて如何も、此通りの山の中で、隠し様が無い。まさか地を掘つて生理にも出来まいし、それを隠したてえのは、お前さんが無理です。それ程疑うなら、幸ひ大勢連れて居るんだから、まア山中探して見給へ」

「おう探さなくッて如何するものか」

「かんがら婆は、それッて、指揮すると、大勢の乾漢は、八方に散つた。岩の後、木の間、草の中、穴の奥、龜甲山中探したが、如何しても分らない。」

さすがの「かんがら婆」も之には情氣で、大板の下に「茫乎」として居ると、二ツ股の間からお登女は顔を出して。

「探して分らなければ妾の方から出るわ。阿母さん、此所なのよ」

『六 七』

「まアお登女。そんな處に居たのかい。まアお前は、まア本統に、如何したもんです」と「かんがら婆」は吐鳴り上げた。

「如何も仕ません。何時までも隠れて居ようと思つたんですが、餘んまり探し様が下手だから、見て居られなく成つたんですよ。何時までも無駄を爲せるのが氣の毒ですから、自分から名乗りを揚げたんですよ」とお登女は板の上から笑ひ落す。

「馬鹿にしてるよ。好い加減人を玩弄にしねえ。さア、まア、降りて、さア、妾と一緒にお歸りよ」

「厭ですよ。阿母さん。妾は既う歸りませんよ」

「そんな事が有るもんかね。今日一日だけ暇を呉れてえ約束ぢやア無かつたかえ」

『その約束をお前さんは聞かなくって、妾を柱に縛つたぢやア有りませんか』

『縛つた代りに御馳走したぢやアないか』

『それ御覽なさい。一日の暇を出さない様な分らず屋の處に、誰が歸るもんですか。妾は自分で逃出したんですから、其方で捕へるなら知らない事、此方は何處までも逃げますよ』

『そんな憎らしい事を言ふんだよ。如何して遣らう。引下したら首ッ玉へ繩を附けて、玉川端を引廻して遣んべえか』

『石油の空罐ぢやアあるまいし』

『さア誰か木へ登つて、お登女を引摺下してお呉れよ』

『おい』と答へて、一人向鉢巻が、大板に登らうとした。

『お前なんか引摺下される様な妾では無いよ』とお登女は上から冷やかすので、赫と上氣せ
た若者が、中途まで藻掻きながら登つた時に、お登女はヒヨイと次ぎの松の樹にと飛移つた。
其身の軽さ、木の葉一枚落さぬ。繋がつて居る蜘蛛の絲も切れぬかと思ふ許り。

『あッ』と思はず下から叫んだ。すべての人の口からである。

『それ、松の方へ誰かお登りよ』と婆アさんが指揮すると、言下に又一人登つて行く。それが

途中まで達しると、お登女は又次ぎの椎の木に飛ぶ。

樹から樹を木鼠の如く飛んだ。樹といふ樹には大概人が登つた。今は既う筏路に添ふ山麓の
用水を飛越して、逃げるより他には無く成つた。

これは併し餘りに冒険である。恐らく此所で行詰つたらうと他の者は思つたが、松倉のみは
霧山川の手並を知つて居るので、然うは思はぬ。

お登女は秀之助等の方に向つて。

『斯ういふ譯ですから、妾、一端妾を隠しますわ。然うしてね、其間がんがら婆さんに知
い様に、貴郎方と逢つて、例の一件を取出しに行きませうねえ。それを取出せば如何にでも成
るんですから、今日の懸賞なんか、向ふから持つて来ても、お受けなさんなよ。一萬圓、大城
の顔へ擲き付けてお遣んなさいよ』と言捨て、獅子の谷飛びといふ離れわざ。樹の上から用水
を飛越して、立つた筏路。

がんがら婆ア、我を忘れて。

『えらい〜』

「六八」

玉川端で行はれた飛行機模型競争會は、或る意味に於て成功したが、或る意味に於て失敗であつた。

一等賞を得た者は天津風之助と假名を呼ぶ何處の者だか知れぬ青年で、それが卑怯にも電氣仕掛で飛行させた疑ひがある上に、其事が露顯に及び掛けた結果、園遊會場で亂暴して、何處ともなく逃去つた。故に賞金は渡す可らざるものと、斯う發表された。

然うして、いづれ改めて競技會は遣り直しを爲るといふ事である。

斯う成ると賞金一萬圓の終局は着いたけれど、納まらぬは審判委員である。名譽の將軍もある。有名な博士もある。それ等が皆盲目で有つたといふ事に成るので、いや、盲目で無い以上は、手品を造つて飛行させたのを認めないと言ふ事は無い。認めて猶且つ一等賞を與へんとしたのには、甚だ不都合といふ事に成る。

發起人等は自己の責任を逃れたい爲に審判委員の名譽を毀けて顧みぬ。これが現代紳士の状態かと思ふと、實に慨嘆せざるを得ない譯だ。

磯島兄弟と松倉とは酷く此點を憤慨した。然うして賞金一萬圓の放棄は前からの覺悟であるが、遣ひも爲ぬ電氣云々、聞捨に成らぬ事だ。機會もあらば辯妄して置かぬと、後日の爲に成るまいと考へて居た。

龜甲山でお登女に別れてから、半月ばかりに成るが、それ限り音信が無い。何處へ飛んで行つたのか、怪少女の事として更に分らぬ。

これは併しがんがら婆の方の氣を抜く爲と考へられた。婆アさんは必ずお登女は磯島の家に来る者と信じて居て、多くの乾涙を見え隠れに、交代で番をさして居り、磯島の家へ来る者が有れば、一々其何者であるかを調べる様子。

若蠅い事だと思ひながら、一方には又がんがら婆さんの、執心の深いのにも驚かされた。

或日、壽男も松倉も不在の時に、一軒屋へ訪ねて来た一人の客。

秀之助これを出迎へて見ると、既う五十に近い、髭の美しい、小肥りの紳士。鳥羽の薩摩飛白の羽織に着物、粗末な扮装はして居るが、何處となく威風堂々として居る。

「やア矢張君ちやツたなア」と言ひつゝ、其人は微笑を洩らした。

然う云はれると如何やら見覚えが有ると、秀之助も感じて来た。

『あッ貴郎は……』

『や、吾輩は荒根保臣ぢや』

『あッ荒根閣下で御在ましたか』

陸軍豫備少將荒根保臣氏は、熱心なる空中船の研究者である。既に先日も審判委員長として競技に立會つたのであつた。

『やア、吾輩は、是非君に逢つて、種々話して見たいと思つたのぢやが、天津風之助とは偽名ぢやといふ事で、従つて其住所も分らない。如何したら好えかと思つて居る間、あの人は中野村に居る磯島秀之助といふ者ですと聞いてのう、それで今日訪問に来たんぢや』と飽くまで打解けた言方である。

『や、わざ／＼御枉駕で恐れ入りました。御一報下されば、此方から参上致すので御在ました』
『いや、發明家を訪問するのは吾輩の寧ろ名譽とする處ぢや。まア君、種々話が有るんぢやが上つても好えかね』

『お上り下さいましたが……取散らして居りますので……』
『そんな事は構はん。失敬する』

『六九』

『それでは一寸掃除でも致しますで……』
『野營に馴れた軍人ぢや。埃だらけの中が却つて好えよ。はッはッはッ』

荒根將軍は取散らした仕事部屋に通つて、愉快氣に製作中の飛行機を見遣りつゝ。

『や、磯島君、最初に吾輩は君に言ふとくが、君が密かに電氣を使用して、先日の競技に成功したといふ、あんな愚説を吾輩は信じて居らんぞ。君の成功は正々堂々で有つたと認め一人有るで、それでわざ／＼訪問しに来たんぢや』と語り掛けた。

『あッ、それは實に有難う御在ます。千萬人の俗衆が何と申しませうと、閣下が今の御一言は生命が保たれるので御在ます』と秀之助は涙を早や眼に浮かべるのである。

『併しぢや、如何いふ理由で君が偽名したか。それが少し氣に喰はぬが、夫には又買はうとした事など物語つて。』

『それは斯うで御在ます』と最初に大城父子が松倉の紹介で訪問し來つた……

「然ういふ譯ですから、其時の大城氏が、副會頭で有る處へ、磯島の名で行くらう。幸ひ彼の時は顔中縋帯して隠して居ましたから、よもや見覚えては居るまいと」

で、それで天津風之助の名で出場致しました。今から考へると、何も偽名までして出るにはびませんでした。唯、見物に行つて各發明家の模型を参考に見て置けば好かつたのです。當日第一の記録を作つた優等品よりも、自家の發明品が優秀で有るといふのを、自分で以て認めさへすればそれで好かつたのですが……お耻かしい話ですが、何分の微力で、飛行機を作り上げて、發動機を買ふ力の無さに、賞金が取れたらば夫を使用してなんと、つい賤しい心も出たもんですから……」と包まず事實を語り了した。

荒根將軍は少からず感動して。

「やア然ういふ事ぢやツたのか。それで能く事情が分つた……大城に就ては種々吾輩不快に感じて居る事が有るで、それは先づ後日の問題として、差當つて研究すべきのは、君の發明ぢや。あれだけ集まつた澤山の模型中、確かに君のが一頭地を抜いて居たんぢやから、之をして原形の飛行機の製作に従事せしめ、日本に於ける空中飛行機の勢力を、世界に向つて示すものは最も必用ぢやらうと考へる。吾輩の考へは、誰が發明しても好え。最も優秀なる飛行機が

出來ると見たら、其人に應援すべきである。斯ういふのぢや。但し吾輩は軍人で貧乏ぢや。資本金を提供しやうなんて、そんな事は出來んけれど、不屈不撓の精神を吹き込む……餘り夫は大袈裟ぢやが、結局精神上の應援をするぢう事に就ては、敢て人後に落ちんつもりぢや」

「それで澤山で御在ます。然ういふ閣下の如き御同情を得ますと、どの位嬉しいか存じられませんか……閣下……今日までは、私等兄弟の苦心は、常に侮辱と嘲笑の間に葬られて居りました。一二の人の他には、殆ど世間の總てから、狂人白痴として扱はれて居りましたが、閣下の唯今のお言葉で、初めて……光明を……認めました」と涙を流して秀之助が喜ぶ。

「やア其侮辱が、矢張、君達を勵ましたんぢや……」と將軍も眼を濕はして言ふ。

『七十』

荒根將軍は種々参考になる話をして、大いに秀之助を勵まして去つた。それから度々遊びに来て、松倉にも壽男にも逢ひ、熱心に飛行機の成功を祈るのであつた。

大略最新の考案は成つて、いよく原形組立とまで進んだ。發動機は場合に由つて、空中研究會の品を借りて來ても好いと將軍の言葉。萬已むを得なけ

れば、夫を借りて試験するより他には無いが、破壊した時には辨償しなければ成らぬ。思ひ切つて試験が出来ぬ。成るべくは借りたく無い。それに附けても彼のお登女。玉川端の龜甲山で別れた限り、未だに消息の無いのを見ると、砂金取りの一條も或は空に終るのでは有るまいかと、内々秀之助は心配して居た。

松倉は然うく秀之助の爲に飛歩いて許り居られぬ。自己の學業の爲に勵まねば成らぬので休暇以外は手傳ひが出来なく成つた。

幸ひ砂金の残りをチビ／＼取替へるので食ふには困らず。其お蔭から壽男は工場の方を休んで、一心に助手の方を勤めて居る。

今日も飛行機の材料に必用で、竹の買入れにわざ／＼目黒村まで、藪の中から適當なものを選出さうと、途中まで行つた處が、定めなき秋の空、雨がポツ／＼降り出した。

天を見ると、雲が切れて居る。大した降りも有るまいから、雨宿りを何處かで仕様と、畑の中を駆け出して、辿り着いた地藏堂。此所が好いと軒の下に入つて一息して居る後から、突然肩を打たれたので、石地藏が化でもしたかと、吃驚して振向いて見ると、意外を導る通り越して居る。何時の間にもやらお登女が来て立つ。

「まア吃驚した。如何して此所へ。何時の間に来て？」と壽男は問うた。

「厭ですよ。お前さんの様に茫乎して居ては仕様が無いわ。後から突如喉を締めたら如何します。聲も立て得ないで殺されるより他は無いでせう」とお登女は笑ひながら言ふ。

「然うですね。全く不意ですから……」

「妾が石地藏の後に隠れて居るのを見極め無いで、畑の方を向いて立つたからですよ。妾はお前さんが来る前から、此所に雨宿りして居たんですが、慌だしく壽男さんが、此方へ駈つて来るのを見て、一寸隠れたのよ」

「と、遇然此所で出會つたのですね」

「まア遇然と云へば遇然ね。妾は誰かに逢ひたくつて、其機會を待つて居たんですが。そら、がんがら婆アの手配りが嚴しいので困つてね……だが、今日は、新宿の此方で、チラと壽男さんの姿を見たまんですから、附けつ離れつてね、此所へは先廻りよ。お前さんの通つた路は大廻りで損なのよ」

「然うですか。まア併し貴女に逢へて好かつた。兄さんも松倉さんも、どんなに貴女の来るのを待つて居るか知れませぬ」

「然うでせう、妾も是非逢つて、打合せが仕たいのですが、かんから婆アに捕まると、妾、困つて了うのですわ。と云つて何時までも逢はずには居られないでせう。妾、發動機を買入れるだけの砂金の有り場所を教へてね、誰かと一緒に取りに行きたいのですが……あッ斯うして下さいな。其打合せを爲るのですから、翌日お天気でしたら、かんから婆アの見張りの者に覺られない様に、貴郎の兄さんにね、飯津の海安寺の境内まで、お正午過ぎに来て下さる様にね、然う言つて下さいよ」

「飯津の海安寺？」

「品川の先よ。有名な紅葉の名所ですわ」

「其所に砂金が有るんですか」

「あら厭な。一萬圓からの砂金が、そんな處に有るもんですか。小出しの益だつて雲山谷の石の唐櫃を開けなければ無かつたでせう。本統に産出する處は、大變な山の中で、滅多に人の行かない處、其所へ行くんですから大探検ですわ。其打合せをするんですから、屹と翌日お天氣なら、海安寺へね、好ごさんすか。兄さんに、屹と来て貰つて頂戴よ」

「然う言ひます」

「あッ、既う雨は中止みだわ。誰かに見られては面倒よ。妾お先さへ……」

「七一」

「明くる日は雨どころでは無い、氣の澄む許りの快晴。海安寺の紅葉ソロソロ色附いて来て品川の海のながめ一入である。」

「丘上の腰掛茶屋。葦籬の蔭に一人の侍女風の娘が休んで、人待ち顔。それは別人では無お登女。」

「正午を過ぎて大分に成るが、約束の秀之助は来らぬ。少々お登女は感情を害ねて見え何時までも此處に休んで居るのは茶店の婆さんにも極りが悪い、来る客にも顔を見らで困る。」

「幸ひ今日は日曜でなく、紅葉も未だ盛りに成らぬので、人の出は餘りに多からぬ。こよりだと聊かお登女は慰めて、葦籬の蔭を出たり入つたりして居る。」

「二時過ぎる頃漸く石段を登つて、喘ぎく此方へ来る人。それは併し秀之助にあらすして松

松
石
段
を
登
つ
て
喘
ぎ
く
此
方
へ
来
る
人
。

倉園彌。今日は袴を穿いて學校歸りといふ扮装である。

お登女が楓の老樹の下に立つて居るのも心づかす。グン／＼石段を上つて岩倉公の墓地の方へ行かうとは爲る。

「何處へ行くんですよ松倉さん。妾は此處に待つて居てよ」とお登女は呼掛け

「やア其處か。つい天氣が快いもんだから……」と松倉はドキマキしながら答へた。

「天氣が快いと人が見えなくって？」

「然ういふ譯では無いが、つい浮かれて行かなくとも好い處まで行きたがるもんだ」

「相變らす分らない事言つてねえ。まア此方へ」

「お茶でも飲むかな」

幸ひ此時茶店には、他に誰も客は居らぬ。二人は掛けて、老婆がすゝめる茶など飲み。

「如何したのですね、磯島の兄さんの方が来る筈ぢやアなくって。妾、貴郎に来て下さいと傳言したのぢやア無い事よ。壽男さん間違へて？」

「いや然うでは無いです。僕が来るんぢやア無い、當然秀之助君が會見に来る筈なんだが、それがね、然う行かなくなつたので、僕が代理に来た譯なんだ。といふのは、例のがんなら婆の

見張は依然として嚴しい。別して秀之助君の外出となると後を附けて如何も成らん。それは併し如何にでもして破れるが、生憎今日秀之助君が出やうとして居る處へ、お客様が見えただね」

「お客様だつて構はないわ。用が有りますから、之から外出する處ですと云へば好いわ」

「それが然う行かないお客様なんで……」

「誰ですか、そんなお客様は？」

「此頃熱心に我々を勵ますべく枉駕される荒根少將でね」

「えッ荒根少將が……あの……荒根保臣といふ方でせう」

「その保臣さんで……荒根少將は熱心なる空中飛行の研究家で、其方が彼の競技の發見わざ訪ねて來られて、一方ならずお力添えで……今日も、その、荒根閣下が見え……」

「然うですか。荒根さんが……あの同情して下さつて？」とお登女の言ひ方が妙に響くので松倉も變に思うてか。

「お登女さんは其、荒根將軍を知つて居るんですか」と問掛けた。

「まア、それは、今申しますまい。それよりも肝腎の相談………」と言掛けて四邊を見廻し。

「此處では如何もイケない事よ」

「それでは下の墓地へでも行きませう。彼處なら滅多に人が來ない」

「ぢやア然う仕ませう」

お登女と松倉とは、紅葉の茶屋を出て丘下の墓地にと入つた。

「七二」

紅葉を見に来る人は有つても、墓詣でに来る人は殆ど無い。同じ海晏寺の境内でも、丘の下は別天地だ。

墓と墓との間を通つて、ずつと奥の楕垣の内。殊に大きな墓石の前に、お登女と松倉とは留つた。

「道んな處へ来て、人に見られたら、何んとか思はれるでせうねえ」とお登女から言出した。

「なアに構はんです。人が見たら親の墓参りに来て、墓を探すと見れば好いです」と松倉は答へた。

「親の墓を忘れて探す者が何處に有りますかッ」

「これは悪かつた。それでは遠い親類のだつてね。は、は、そんな事は如何でも好いとしていよ、大事件の相談に掛らなければ成らないです。まアお掛けなさい。其處の墓石に失敬するが宜しい。僕は此方の拜石に、どっこいしよ、斯うして腰を掛ける」

二人が墓石のそれに腰を掛けると、宛然水底に沈んだ様で、石塔の頭や垣の先が見える許り。全く人目から隠れて了つた。

「其所でお登女さん、砂金の一件ですが、全體何處に有るんですか。それを話して下さい。僕と壽男君とで又引出しに旅行させよう。今度も亦、白髯の老翁に出會ふのですか。あの方は未だ如何にでも成るですが、羽虫が飛んだり、蚊がニヨロ／＼して居たり、あれは實際恐れるですよ」

「まア、そんな大きな聲を出しては、折角此處に隠れて話すのが何んにも成りませんよ。小ツさく成すいよ、聲をさ」

「はい、はい」

「今度の處は却々大變な處よ。羽虫や蚊とくところでは有りません、狼が出るか、狒が出るか、

それとも山男が出るか」

「やかしてはイケない」

「いや、その深山なんです。ですから、其所が妾の寶の庫ですわ。誰でも行ける處なら、誰でも砂金を取出すでせう。然ういふ處では仕様が無いわ。誰にも滅多に行かれない處に有るんで、それで好いのですよ」

「や、最もだ。それなら其つもりで僕も行くです」

「あら、貴郎と一緒に行くのでは厭ですよ」

「えッ、それでは誰と一緒に……」

「知れてるわ。磯島の兄さんの方と」

「それは駄目だ。逆もそんな恐ろしい……」

「だって、女の妾でさへ行くわ」

「お登女さんは特別の人だ。女にして女に非ず。餘程水泳が上手な人だ。磯島君は男と云つても、極めて優しい性質なんだ。頭で物を考へる人で、決して手で物を取出す人では無い。其所へ行くと僕は冒険男兒だから……」

「厭ですよ。妾、松倉さんと一緒に山の中へ入込むのは厭ですよ。そんな手軽に見られては御免ですわ。妾に取つては大事の砂金……天から授かつた氣で、それで妾は大變な役目を果さなければ成らない身分ですわ。磯島さんの飛行器の發明を助けるのは、妾に取つては枝の話ですわ……磯島さんが行かないで、貴郎が代つて行く様なら、妾は既う止めにしますわ」とお登女は甚だ不機嫌である。

「や、然う僕を軽く見ては困る。僕は君の寶の庫を見たからッて、後から又それを取出しに行かうなんて、そんな卑劣な事を爲る者では無い。誠意誠心を以て、友人の國家的事業を助け様といふに他ならんのだ。つまり秀之助君に代つて、わざわざ深山に入らうといふのだ」と松倉も氣を荒くして來た。

思はず知らず二人は高聲に成つて、墓場へ隠れて居るのを忘れながら言争ふ。

七三

「いらッ」と一聲、叫んだ者がある。

言争つて居たお登女と松倉とは、失敗つたと氣が着いたが遅かつた。大聲で論じて居ては、

いくら姿を隠しても何んにも成らぬので有つた。

「こらッ、貴様達は何を其所で論じとるかッ」と重ねて高飛車に出て来たので、巡查かと思ひながら二人は立上ると、横垣の向ふに顔の見えるのは、變な帽子を冠つて居る日立齋伯だ。

「やア日立先生ですか」と松倉は安心して聲を掛けた。

日立齋伯は意外だといふ顔附で。

「何んだ、君か。僕は無頼書生が少女を墓原へ連れ込んで、怪しからん事を企てるのでは無いかと思つたんだ」

「それは酷い誤解です」

「でも、然う信せざるを得ないよ。全體君は其少女と、何を論じて居たんだい」

「先生は又何をしに此所へ来たんですか」

「海安寺の紅葉を寫生に來たが、未だ少し早いので、仕方が無いから墓地へ來て新墓でも寫さうかと思つて、ウロウロして居ると、若い男女の聲が聴えたので、之は怪しからんと思つて此方へ來たんだ」

「些とも怪しからん事は無いのです。正々堂々たるもんで」

「あんまり然うでも有るまい。青春の男女が墓場の間に隠れて……」と言ひつゝ此方へ遣つて來た。肩から繪具箱を提げ手にカウンスを抱へて居る。

「青春の男女が墓場の間に隠れて、ヒソヒソ話でも仕て居たら、それこそ怪しからん事件でせうが、お聞きの通り滔々と論辯を圖はして居たんです」と松倉は飽くまで辯解の意氣組、お登女は横を向いて脱して居る。

「なる程滔々と論じて居たね」

「これには多少貴郎も關係して居る事件で、いや多少どころでは無い。第一、先生が悪いのです。日立齋伯が悪かつた爲に大事件を惹き起して、従つて此所で秘密會議を開かざるを得ない譯に立至つたんで……」

「おい、言掛りを言ッちやア困るよ」

「いや言掛りでは無いです。貴郎の一言の爲に、磯島秀之助は一萬圓の賞金を棒に振つて、おまけに彼の玉川河原の大喧嘩でせう」

「申戲ちやアないせ。僕が一萬圓棒に振らしたなんて……」

「だッて、磯島は仔細有つて、天津風之助の名で、あの會へ出て、御承知の如く成功したんで」

せう」

「然うだ」

「それを先生が園遊會へ行く途中で、おい、磯島君、何故天津風之助といふかなんて、素ッ葉抜いたでせう」

「うむ、悪かつたかね、あれが……」

「それが爲に化けて居たのが露顯して、それからそれと大波瀾を生じて、あの始末です。賞金は一文も取れません。茲に於て他の方法を以て、發動機を買入れるだけの金を工面せざるを得なく成つたでせう」

「それを這んな女の子と、這んな場所工面しやうと言ふのだね」

「然う解釋されては困ります。それに第一、この少女を、這んな女の子だなんて安ッぽく見られては可哀さうです。あの時、大喧嘩の最中に、川上から船に棹さして下つて来た一少女の有るのを認めませんでしたか」

「や、吾輩も實は君達に加勢しやうと思つたけれど、逆も一人で如何する事も出来ず。巴むを得ず模擬店へ逃げ込んで見ると、其所に鮪が有つたから、ニツ三ツ頬張りながら見て居ると、

なる程川上から一隻の急舸！好かつたね。實にチャンとお芝居に出来て居る。乗つて居るのが髯武者の豪傑では面白くない。それが花の如く美しい少女だったから振つて居たよ」

「えッ！」

「七四」

「あの時の勇ましい少女が此人なんです」と松倉が再び力を入れた聲で説明した時に、お登女は極りの悪さうな顔をして、全く後向きに成つて了つた。

「やッあの時の少女が此人だったか。距離が遠かつたのと鮪を頬張つたら、山葵が利き過ぎて居て思はず泣いて居る間に、船は下流へと既う行つて居た。や、これで君等は大丈夫だ。巧く逃げられたなと思つたもんだから、知らず一萬歳を叫んで、鮪の鮪を又一ッ食つた」と齋伯は何事をも隠さずに言ふ。

「あゝした混亂の際に鮪を平げるなんて、先生は焔々として餘裕が有りますな。實に豪いだな」

「それは先づ如何でも好い。シテ此少女は如何した人なんで……」

「それは未だ誰にも分らないので。何んでも秘密の多い人には相違ないんで。併し大城父子の態度に憤慨して、大いに磯島君に同情して、出来るだけ盡力しやうと言ふのです」

「だつて、此人がマサカ一萬圓近い金を出して、發動機を買つて呉れる譯では無いさうが」

「それが人は見掛に由らないもので、此少女が一萬圓から出さうてんで……」

「それでは、彼の、いつか君が話した、怪少女とは是か」

「その怪少女なんです」

お登女は此時、初めて此方を振り向いて。

「いやですよ、怪少女だなんて……」とにっこり笑つた。

其笑ひ顔を日立壽伯は、つくづく見て。

「やアこれは素的だ。實に是は滅法界も無い美人だ。但し世間的の所謂美人だか如何だか、吾輩それは無關係だが、繪畫的に於てだね、美術家の眼に映じたる絶好の美人だ。斯ういふ人をモデルにして畫いたら、大傑作が出来るに相違無い。ねえ、怪少女君！貴女は發明家に同情するの好いが、ちと美術家にも好意を持つて貰ひたい。と云つて僕は何も一萬圓出して貰はう

といふのでは無い。唯貴女を寫生さして頂ければ好いのです。それも必ずしも裸體に成つて貰はんでも好いのです。如何ですか」と壽伯は横路へ話を引込んで了つた。

お登女が常の氣性からだすと、頭から壽伯を罵倒して掛ると思ひの他、意外にも打碎けた風で。

「貴郎は有名な日立先生ですか」と問ひ掛けた。

「餘り有名では無いが、古くから畫は書いて居るで……」と壽伯は嬉し相である。

「妾をお書き下さるより、妾の親達の肖像を畫いて頂きたいのですよ」と妙な事を突然言出した。

「えッ親達の……」と壽伯は聞答めた。

「二人共死んで現世には居りません。寫真も残つては居りません。然うして其者は世間から全く誤解されて……非常な憎しみを受けて……怨恨を呑んで死ましたのですが……妾が口でも言ひ形でも見せて、誰と誰とに似て、斯うした人の口元と、斯うした人の鼻筋と云ふ風にお話したら、あの肖像が畫いて頂けるでせうか」

「それは難かしい事業だが、まア畫いて畫けない事有るまいと思ふ。だがもつと委しく兩親の事を……」

『それを今話したら、妾の秘密は無くなりますわ。併しですわ。世間で非常に嫌つて居る者の肖像でも、先生は書いて下さいますか』

「繪畫の上には、どんな人物も一様に見える。たとへば大金持も書けば、乞食も書く。聖人も書けば小人も書く」

『さすがは日立先生だわ。それでは妾お願いしたいんですが……』

「や、併し、君をモデルにして僕にも傑作を仕上げさせて呉れなくては困る」

二人の相談が成立ちさうなので、松倉は面喰つて。

「待つて下さい。そんな事は、まア此方が片付いてからにして貰はないと困ります。だが、此所に最も都合の好い事は、畫伯の處へ一兩日お登女さんを預ける事です。不意と又此儘お登女さんが居なく成ると、我々は大いに困る。それで畫伯の處へお登女さんを居らしめて、早速秀之助君をして、打合せに訪問せしめて、砂金取出しの手筈を定める。これが何よりの良策と考へるです」と言出した。

【七五】

お登女も日立畫伯の處へ行くのを承諾した。畫伯も萬事呑込んで、それでは一兩日宅に置くから、秀之助と會見さして、一萬圓からの砂金取出しに行く様にと、何處までも好意を表して居る。

此日は、それで別れたが、松倉は此事を秀之助に話したので、それでは少しも早くお登女に逢はう。では有るが、例のがんがら婆アの見張が一向緩んで居らぬから、充分に警戒して行くを要すると、朝早くから立出て、用も無い方角を彼方此方と廻つて、大概誰も附いて居ない事を見定めた處で、水道橋畔の日立畫伯の家に入った。

取次の書生は心得て居て。

「さア早くお上んなさい。玄關でグズグズして居る處を見られてはイケません。先生は畫室で待つて居らっしゃる」と急立て、脱いだ靴を直ぐ取上げて、下駄箱に隠した。

秀之助は、そわ／＼しながら、導かれて畫室へ入つて見ると、和風建築の室を洋式に飾つて中央に卓子がある。卓子の周圍に椅子がある。椅子には畫伯とお登女とが掛けて、何か雜談最中であつた。

「やア磯島君、能く來た。待つて居たんだ。先日は如何も失敬したね。僕が呼掛けた爲に大波

瀾を生じたさうで、昨日散々松倉君から言はれた。其代り今度は巧く盡力する。お登女嬢も酷く乗氣なんだ」と壽伯は例の解放的態度で辯じ立てた。

「先生にまで御迷惑を掛けて済みませんです」と秀之助は改めて禮を述べた。

「いや、迷惑では無いです。斯ういふ件は非常に興味を以て見る。場合に由つては吾輩砂金取の一行に加はつても好いのだが、」

貴ふので満足せねば成らない。はアはアはア」と高笑ひする。

お登女は松倉に向つた時とは違つて、秀之助には例の齒切の好い言葉が出て来ない。と云つて別に耻合ひのでも無い。

秀之助の方から口を切つて。

「それでお登女さん、如何いふ様にしたら好いのですか」と問ふ。

「貴郎、妾と一緒に下されば好いのです」とお登女は譯も無氣に答へるのである。

口でこそ一萬圓である。併し、秀之助の身分に取つては大金だ。それが譬へ砂金とは云へ、格別の縁も無いのに惜氣もなく取出して呉れるといふ、餘りに突飛に過ぎて、怪奇の度を越すのであるが、其所が又普通の人で無いので以て、怪少女の今日までの舉動から考へると、決して偽りで無い事に分つて居る。

不思議の運命は旋風の如く吹き廻つて居る事を、秀之助は信せずんばあらず。

「それは僕が行つても好いのですが……僕に嶮岨な山が行けるでせうか。それに一萬圓だけの砂金の重み……貴女と分けて擔ぐにしても、僕に夫が耐えられるでせうか……如何か松倉だけは僕同様に見て同行をゆるして下さい」と言入れた。

お登女は打消して。

「いゝえ、重くつても好い様に成るんです。妾の影には何か彼か附いてますわ。其御心配には及びません。それにいくら嶮岨の山だからって、一生懸命に成れば如何にでも成りますわ。女ですけれど妾でさへ行くのですもの」と言つて婉然した。

壽伯は側から又説明して。

「それでお登女さんの言ふには、君が又中野へ歸つて、再び出て来るのでは、見張に見付かつて危いから、來たら直と出立して貰ひたいちうのだ。然うして普通の扮装……別して洋服ならんぞ着て行つては、人目に着いてイケないから、變装して行つて呉れといふ注文なんだ」

「變装？」と秀之助は驚いた。

「それでお登女さんの言ふには、君が又中野へ歸つて、再び出て来るのでは、見張に見付かつて危いから、來たら直と出立して貰ひたいちうのだ。然うして普通の扮装……別して洋服ならんぞ着て行つては、人目に着いてイケないから、變装して行つて呉れといふ注文なんだ」

「變装？」と秀之助は驚いた。

「ちやんと既う、君、用意がして有るんだ。機敏だらう」と壽伯は笑ひながら言ふ。
お登女も、ニコ／＼笑つて居る。

七 六

日立壽伯は寫生用に様々の服装を要するので、其都度新調するには面倒であると、芝居の衣裳屋と連絡を取つて、其所から借入れる事にしてある。

斯ういふ手順で秀之助とお登女とは、容易に變装する事が出来て、書室の中で秀之助は、越中富山の藥賣、お登女は越後の毒消し賣に早替りした。

深山に入るのには斯ういふ服装が目立たぬからである。

お登女は今日まで様々に變装して來て居るので、めくら縮緬ひの今度の毒消し賣などはお茶の子であるが、秀之助は今度が始めてなので、甚だ極りが悪い。

手甲、脚半、角帯を締めて、脊に藥の荷を紺木綿の布呂敷に包んで背負つて、絲立に菅笠、んな古風な姿は餘程の山奥に入らなければ見られない。現代と隔絶せる事甚だしい。其舊式の扮装の人の頭に、最も新しい空中飛行機の發明が有らうとは、誰か知るべき。

二人は斯うして別々に日立壽伯の家を出で、上野の停車場で落合つて、信越線の流車に乗つた。

坂本驛で下車した時には、東京程の耻かしたが、秀之助の心に消えて居た。土地の空氣が夫を入れるに適つて來たからでもあらう。

「これから何方へ行くんです」と秀之助は思はず口走らした。

「何方へ行つても好いのですわ。是から妾の物なんです」とお登女は笑つて居る。

「と云つて、無闇に引廻されては因る。僕は足が弱いんですから……」

「あら、そんな人の悪い事は仕ませんよ。引廻すと云つた處で、上州中の温泉場廻りでも爲る位です」

「そんな悠長な事を爲れては、猶更困る……」

「申談ですわ。そんな事仕ませんよ。ですが、餘り廻り路でも有りませんから、話に倦いて知つて居ませう。霧山川を鐵線渡をした處、其所から影澤の官林に入つて見ませう。霧山郷の山海嘯で、全滅した跡も見たいんですが、それでは餘りに廻り路過ぎますから……」
「何分好い様に頼みます。僕には何んにも分らないのだから」

「斯うして同じ薬賣でも、越中と越後とでせう。一緒に並んでは疑はれますわ。山の中に入つたら好いのですが、此邊ではね、一町か、半町か、貴郎は後から入らッしやい」

「すべて命令に服従しますよ」

お登女の後から一町位遅れて秀之助は附いて行く。曲り角になるとお登女は振り向いて見て、人が居ないと婉然と笑ふのである。其が無邪氣で如何にも愛らしい。

人に快感を與へる様に、天性から出来て居る。併し道んな具合にして魅せられては、一步一步魔界に引入れられるのでは無いかといふ、然うした疑懼の念さへ生じて来た。

既にして坂本の驛を離れ、半里餘りも行つた處で、谷川の流れに出會した。其崖の上でお登女は待合して居て、秀之助の來るのを見て。

「これが霧山川ですわ。向ふの岸から此方へ、あの大城の令嬢を、妾、負ぶつて渡して遣つたんですよ」と言ふ。

「あッ鐵線渡りは此處ですか」と秀之助は言ひつゝ能く見た。

「今では這んなに水が引いて岩から岩へと飛べば草鞋の裏も濡らさないで渡れますが。あの時は何しろ、これが一杯の水でね。それは恐ろしい勢ひでしたよ」とお登女は指さして以て説明

し出した。

話には聞いて居たが、今、其實地を眼前に見ると、なる程怪少女に違ひない。恐ろしい離れわざを爲るものだと、膽を冷やさるを得ないのである。

従つて之から先き、深山の中に分入つて、どんな事を爲るだろうかと、これが秀之助には恐ろしくも成つた。

「七七」

鐵線渡りの跡を見て、當時の危さを思ひ浮かべつゝ、今日は樂々と霧山川の下流を越して、いよ／＼影澤の官林區域に入つた。

もう此邊ではお登女と秀之助、別々に成つて行くを許さない。お登女の後を直附いて行かなければ、忽ち妾を見失ふからである。又一緒に成つて行つたからとて、疑ひ掛ける人とても居らぬ。

揃ひも揃つた同じ高さ同じ太さの杉が立並んで、笹や雜草が繁茂して居て、それを押分けながら行くのである。霜に枯れて居るので何程か未だ歩き好いが、それでも茨に袖を取られ、蔓

に裾を搦まれて、ともすれば轉びさうに成る。身輕ならば格別、斯うなると多少の荷物、又絲立や笠などが、邪魔に成つて、秀之助はもう今から弱つた。

谷と谷と左右から迫つて蔦紅葉の纏ふ断崖が、屏風を立廻した様な間に入る時がある。斯ういふ場合にはお登女も畫中の人と見えて、名筆のそれが抜出したかとも疑はれる。

岩の間に冠ざる木の枝。其下の晝猶暗い處へ掛ると、お登女の黒装束がそれに入つて、忽ち消えて失せたかとも見える。

不意に飛出す山鳥の羽ばたきに、秀之助が吃驚して立留まるを、振り向いて笑ふお登女。其前髪に蜘蛛の巣のペールの如く掛るのを自らは知らず、今度は此方から笑ひもする。

林は益深く成る。日は次第に落ちて行く。暗さは一歩々々と迫つて来るが、何處まで行つて留るのやら、秀之助には少しも分らない。

殆ど日一杯にそれでも深林を突切つて只有る谷川の岸に出た。向ふは夕霧で限られて、高原か、嶮山か、家有りや無しや、何も分らぬ。それでも林の中よりは餘程氣丈夫だ。

「今夜の泊りは極つて居ますから御安心なさい。暗くつても路は分つてますわ」とお登女は言ふ。

ふ。

「どんな家？宿屋ですか」と秀之助は問うた。

「あら、もう斯うした山の中へ入つては宿屋なんか有りませんよ。夫に宿屋が有つた處で、ういふ極り切つた處へ泊つては、秘密が分りますわ……泊めて貰つて秘密の分らないで居る家を撰んで宿にするんですが、都合好く然ういふのが無い時には、已なを得ず野宿ですわ」

「野宿？」

「野宿だつて何んとも有りませんよ。それには相當の支度をして掛りますから……」

「こんな話しながら夜の道、山坂を大分歩いた。秀之助はもう此上は迎も進まれぬといふ場合に、漸く突當つた一軒、火の見える家。

「お唄さん来てよ」と呼ばるお登女の聲を聞いて。

「おや。お嬢様の御聲だよ」と言ひつゝ急いで爐の邊を立てて来た四十四五の女。髪は結んだ儘、衣服とても垢だらけではあるが、何處となく上品な様子。破れ縁に手を突いて。

「まアお嬢様だ、久し振で居らっしゃいました。さア如何か……おや、お供が御在ますね。唯今御すゝぎを持つて参りませう」とまめくしく下へ降り立つ。

「お唄さん、今度は通り掛りよ。一晚とめて貰ひますよ」とお登女も寛いで言ふ。
 「へえ、え、一晚でも幾晩でも、御ゆつくり御泊り下さいまし。こら、小九郎ぼんやりして居ないで、圍爐裡に粗朶でもドシ／＼燃やさないかよ」と盥に水を取りながら、唄さんは怒鳴る。
 爐の傍には大きな體の子供。されば足柄の山中で山姥がそだてたといふ怪童丸も斯くやと思はれる十四五の少年。袖の短い筒ッぽを着て茫乎として立つて居る。
 秀之助は全く夢現境に入つた感がある。深山中の一軒家………老女主………怪少年………此處に如何いふ關係をお登女嬢は有するの、少しも分らない。這んな傳奇的の事實が現在に於て有らうとは如何しても信じられない程に感じて來た。
 と云つた處で、事實は事實だ。信せぬにも何にも現在眼前に横たはつて居るのが夫なので、唯只驚くの他は無かつた。

七 八

足を洗つて二人は爐の端に寄つた。主婦は何彼となく忠實に立働くが、小九郎と呼ぶ怪童は

何處までも茫乎として通して居る。

やがて食事が出たので、空腹の二人は喜んで箸を取つた。口の曲る程辛い鹽引の鮭。それも甘い。炊立ての舌の爛れる様な米飯は猶更に美味かつた。

此山中には此所一軒の家らしく。此一軒の家には母子二人だけ住んで居るらしい。主婦の身はお幹と知れたが、如何した素姓やら更に分らぬ。秀之助の想像した處では、お登女は恐らく例の砂金の一部を出して、お幹を窮境から救つた事の有るらしい。お幹は其恩を忘れる事はお登女の爲には何事をも成すといふ、其様な關係と思はれる。

此夜は圍爐裡に四方から足を向けて、藁を敷いて、お登女と秀之助とは銘々持つて來た毛で身を巻いて、薄蒲團を掛けて寝た。

疲勞して居るので秀之助は、前後不覺に眠り通して、一番遅く明くる朝起き出でた。

既うお登女はお幹を手傳はして、食料其他の荷造りをして居る。

小九郎が荷持に行くと思へて、脚半手甲の扮装。脊負梯子を背にして居る。

荷物の中には銅もある。石油の小罐もある。錠もある。それから太繩の長いのを輪にしてある。それに米や味噌や何かを加へると、隨分の重量だが、怪童小九郎は平然として夫を梯子

「それから、白い紙に、いろいろな物の寫る箱」
 「幻燈だね」
 「それから燈の中から出て来る西洋の金糸糖」
 「モルトンだね。皆んな一度づつ買つて来て上げた品をアないか」
 「皆んなこわしたり食つたりして無く成つ了つた」
 「それより他の物は……」
 「それより他に何が有るか知らねえや」
 「これは妾が悪かつたわね」
 お登女も秀之助も朝飯を充分に詰めて、それから薬入の荷などは此所に置き、其代り小荷物を毛布に包んで、各春に附け、絲立や笠は持つ事にした。
 「それでは、二三日は既う人の顔を見られない、深山の中にいよく入るのです。此家のお嬢さんに別れたら、後は猿か鹿か、ひよつとかしたら、狼か熊か。そんな物に逢ふより他は有りませんよ」とお登女は戯れつゝ一軒家を立出た。
 此所既に深山である。これ以上の深山へ入るのかと思ふと、秀之助は自ら勇者ならぬ事を自

に附けさせた。
 「お前はね、お嬢様の爲にはね、命を捨てても好い程働いてお呉れよ。大恩のあるお嬢様の事だから、いつもの様に我儘を言はないで、一生懸命にね、御用をしてお呉れよ」と咬んで啣める様に母様は言つて聞かせる。
 小九郎は唯合點を爲るのみだ。
 お登女も亦笑ひ掛けて。
 「お前ね、大變力が強いんだから、今度はウンと力を出してね、東京から来た方を驚かしてお上げよ。然うすればね、どんな御褒美でも買つて上げるよ。何が好い。何を買つて上げ様かね」
 怪童小九郎は初めて莞爾として。
 「バツと火の出る、黒い棒、あれが欲しいな」
 「あゝ探見電燈？そんな物は譯ないわ」
 「それから、小さな、ボンと音のする鐵砲」
 「玩具の短銃だね、好いわ、買つて上げるわ」

覺して……だが、お登女の健氣なるにも驚かされ。大きな荷を擔いで平然たる怪童小九郎にも度膽を抜かれた。

『七九』

山上の山、山下の山、いづれを見ても山ばかり。其又山が様々の形をして居る。先の折れた銚の様なのが見える。齒の缺けた鋸の様なのが見える。巨人の後向。小兒の肩車。力士相對するが如き山。親子三人手を引くが如き山。楓に紅き山。松に黒き山。岩に穴ある山。瀧の懸れる山。いづれも皆名が有るだらうが、秀之助には分らぬ。お登女は教へぬ。

一番重荷を脊負つて居る小九郎が眞先に立つて行く。つい手の達しるかと思える向ふの山へも急坂を上下し、激流を徒渉し、大廻りをして行かねば成らず。又しても川と見れば、先きに渡つた一ツ流れの川上。同じ峰つゞきと思つて居ると、其間に一大溪谷。馬の脊の如き山頂を傳ひ、鹿すら飛べぬ絶壁を降り、西に向ふかと思へば東。南かと思へば北。行くのやら、歸るのやら、後には分らなく成つた。

只有る山上の僅かに見出したる平地で正午の辨當を食べて、又歩き出した。

秀之助は昨日から引續いての山歩きに全く弱つて了つて、苦しい息ばかり吐くのであるが、お登女は少しも弱つて居らぬ。お登女よりも小九郎の方が一層平氣だ。

「逆も既う行かれない。お登女さん、全く僕は意久地が無いです」と秀之助が言出したのは、日も暮に近い。谷の底の紅葉に埋まつて居る河原である。

「そんな事、言つて、仕様が有りませんわ」とお登女は笑つて居る。

「既う此所で泊りとして下さい。今夜寝たなら又翌日は歩けるかも知れないが……何分もう如何する事も出来ない……」

「だつて這んな處では仕様が有りませんわ」

「どんな處でも構ひません。全く一步も踏出されなさいです」

「最う一里足らず行くと、岩の間から温泉の出る處が有つて、其所に測量部の人が前年建掛けた板葺の小屋が残つてる筈です。其處まで我慢して下さいな」

「山の一里は平地の十里にも當る。如何して……そんなに歩けるものか」

「ぢやア仕方が無い。此所で今夜は泊りと仕ませう。具合が悪いですかねえ」と言ひつゝ小九郎にも其意を含めて、先づ其脊の荷を下さしめた。

枯葉を集めて河原の小石を覆ひ、其上に絲立を敷いて、それが座席である。木の枝を三本組合せて、それに鍋を下げる。枯枝をドシ／＼投べて湯を沸かす。其後で米飯を炊く。お菜は持参の乾物を焼く。伽羅路やら、梅干やら、それが又減法美味い。秀之助の食は常より倍進んだ。怪童小九郎に至つては、食ふわ／＼。鍋の底を掻き廻して一瓢も残さず食ひ了んぬ。力の強いのも道理と見えた。

「さア毛布を冠つて三人寄添うて寝ませう。近んな處で寝るんですから、冷えるでせうよ」とお登女が言ふか言はぬに、ばら／＼と音して紅葉を弾く雨。

「さア大變。雨が降り出しては、近んな處には寝られせんわ」とお登女は言ふ。

「岩の間に絲立でも張つて、如何にかして雨は防げんでせうか」と秀之助は心細氣。

「雨はそれで防げるとしても、山川は直に水が出ます。寝てる處を押し流されたら仕様が有りませんわ。さア／＼お腹の出来た勢ひで、温泉小屋まで行きませうよ。妾が手を引いて上げますから」とお登女は何處までも健氣である。

八十一

山川の水の出の早い事は秀之助も聞いて知つて居るので、此所にグズ／＼して居られぬのは能く分つた。折角空腹が直つたので、之から一寝入りといふ處も、夫とてなく、一里も先きの温泉の小屋まで行かねば成らぬので、焚火の光で照らしつゝ荷造りをして、絲立を着つ、笠を冠りつ。

怪童小九郎は、枯草を刈つて油坊主の冠る如き雨覆ひを造り、頭に頂き、脊の荷には用意の桐油を掛けた。

白樺の皮を疊んで造つた炬火をお登女が持つて、雨の暗夜を先きに立つ。

唯さへ難儀な道。それが雨である。闇の夜である。火の光が岩や木で遮られる時には、足元の危さ一通りでない。

況してや細い坂路は、太い瀧と成つて雨水が流れ落ちて居る。岩面はツル／＼滑つて、手取りも無い、足溜もない。一ツ踏損じれば千仞の谷底。

「さア此所は危ないのよ。氣を付けてね、左が谷底、右は岩山、探つて見ると左手に木の根が有ります。先を持つと折れますから、成るべく根の方を握んで、それから宙にぶら下るのです。爪立つてスレ／＼に何か觸つたら、思切つて手を放して御覽なさい。それから右へ寄つても、

左へ寄つても、どちらも深い谷ですわ。此所が劍の刃渡りよ」と斯ういふ具合にお登女が説明して呉れるので、漸く無事に通過出来る。

斯う成ると一命はお登女の舌の先に懸つて居る。

時としては、お登女に手を取つて引上げられ、時としては小九郎に腰を押されて突上られ。又或場所の谷渡りには、前からはお登女に手を取られ、後からは小九郎に杖の先を突出されて二人掛りの助けをさへ得た。

一里足らずの間が五里も六里も有る様に思はれたが、それでも二時間餘りを費した後、漸く溪谷中の温泉地帯に達した。

其側の岩の上に、成る程板葺の小屋の殆ど建ちぐされに成つたのが有る。其中へ三人轉げ込んだ。

何より先きに要するのは焚火である。幸ひ鋸屑や木の皮や其他の燃料が多く保存されて有るので、それに石油を掛けて、一時にとつと火を燃やして、濡れた衣服を互ひに乾かすのである。

「まア屋根が腐つて、雨も洩るし。下も濡れて居るし。急いで手入を仕なければ成りませんが

貴郎は疲勞てらッしやるから、其方は妾達に委して置いて、此炬火を持つて温泉に入らッしやい。貴郎が裸体に成つて居る間に、濡れたのを乾かして置いて上げますわ」とお登女は言ふ。「これでは甚だ相済みませんが、然うさして貰ひませう」と秀之助は大喜び。「温泉には矢張板屋根がして有りますわ。大石小石の間から滲いて出るので、酷く熱い」と、非常に微温いのが有ります。清水が流れ込む加減でせう」とお登女は何から何まで通じて居る。此深山幽谷を、吾家の庭内の様に思つて居るらしい。「此疲勞も温泉に入つたら、忽ち治るでせう」と帯を解きながら秀之助は言ふ。「好い心持に成つて寝て了つては厭ですよ」とお登女は戯れる。「いや、然うだつたら、俵を持つて揃ひ上げに来て下さい」と戯れ返して、秀之助は小屋から遠からぬ岩間の温泉に行つた。

「八」

炬火で照らして見ると、大石小石の雪の如く白き間から、潔々として湯気が立騰つて居る。其温泉の溜りは三四ヶ所にあるが、最も人の入るに適當の湯加減の上には、今にも落ちさうな

板屋根がしてある。柱に釘を打つて衣服を懸ける様に出来て居る。其處へ秀之助は入つた。枯木の枝を岩の間に立て、それに炬火を載せた。それから褌衣を脱いで裸體に成つて、温泉の中に飛込んで見ると、熱からず、冷からず、實に自分の無い湯加減である。

これは人間の入る爲でなく、山神の好みで造られたのかと思ふ許り。一たび此温泉に身を浸すと、忽ち神仙と化しは爲ぬかと疑はるゝ許り。疲勞などは何處へやら、秀之助は非常に快感を覚えて来た。従つて眠く成つて来た。

此儘眠つて了つたら如何だらう。
此儘死んで了つたら如何だらう。

折角の發明も空に成つて了うのだと思ふと、急に又覺醒して来て、ゆる／＼温泉に入つて居られぬ様に感じて来た。

然るにても分らないのはお登女の身上だ。大秘密は何日に成つたら解けるのであらうか。如何いふ譯で砂金の有る處を知つて居るのであらうか。

その大寶庫の口を開いて、自分の發明に多大の力を添へて呉れるのは難有いが、扱て其成功

の曉には何か自分に要求するのでは有るまいか。

お登女と自分との運命が、之から何時までも繋がる様な事に成るのでは有るまいか。

いや、浮いた戀では無い。何でも無い。今は戀など考へて居る少しの透間も持つて居らぬ。唯一心は飛行機の完成！

嗚呼、一寸でも戀で無いかと疑問を起したのさへ耻づべしだ。必竟温泉などに入つて氣が緩んだからいけないのだと、早速秀之助は飛出して、體を拭くのさへそ／＼に、褌衣を引掛けて小屋へ歸ると、既う濡れた衣服も焚き火に乾かされ、雨漏りも直されて、鋸屑の上に毛布が敷いてある。

「随分ゆつくりしたわね。さア其體の温泉に暖まつた處で、直と毛布に包まつて寝てお了ひなさい。小九郎は不性ですから、湯に入らないてえます。妾一ツ暖まつて來ますわ」とお登女は立上つて、又新なる炬火を手にしたが。

「ですが、今、御馳走をこしらへて來ますから、寝ても本統に眠らないで居らっしゃいよ」と言捨て、破れ小屋を出て行つた。

小九郎は着のみ着の儘、寒いとも暑いとも感じないといふ風で、ゴロ寝をして了つた。

秀之助も體温の發散せぬ間に、急いで毛布に身を包んで横に寝た。併し眠られは爲ぬ。山々の雨の音、木々の葉の音、谷川の水の音。何處やらで鹿の鳴く音。お登女も、さぞや、好い心持に、温泉へ浸つて居るであらう。炬火の光が湯壺の上に紅い浪を漂はして居る處、大石小石の雪の如く白い間に、それよりも白い天女の乳や弄らるゝ。ぼつり／＼落ちる板屋根の雨漏りに、黒髪は玉をつらねた様に見えるは爲ぬか。あのバツチリした眼で、山嵐の爲に吹き立てられる湯の煙、さまざまの象に見えるのを、消行く先まで見送つて、山神の謎を解かうと様に考へてもして居るか。大深山―大幽谷―温泉に夜浴する少女、如何しても神仙譚に有りさうだなと考へて居る間に餘りに身の内のホカ／＼さから、つい、とろ／＼と眠つた。

「八二」

つい、眠り掛けた秀之助の唇に、すべ／＼と軟かな……温い物が觸れたので、吃驚して目を覺して見ると、木瘤の枕下に何時しかお登女が來て坐つて居る。「寢てはイケませんよ。さアお約束の御馳走………」と言ふ。

口に無理に押籠められたのは、すべ／＼と軟かな温かな、湯出玉子の皮の刺いたの。「あッ」とは言へたが其次ぎに、これは珍らしいと秀之助の口は働かぬ。頬張つて了つたからである。

「熱い温泉の方へね。ニツニツ入れてね、玉子を湯出たのですよ。鹽氣が足りなければ、もつと附けませうか」とお登女は言ふ。

「意外の御馳走………近んな山の中で………贅澤です………」と稍つと呑み込んで秀之助は答へた。

生れて今日位物の美味い日は無いが、別して此湯出玉子は、未だ會て味はつた事の無い珍味に感じた。

「さア、それを上つたらお寢なさいよ。翌日が又大變ですから………」

「温泉に入つたり玉子を食へたり、これなら翌日は又歩けるでせう」

既に高野の小九郎を中に挟んで、右と左にお登女と秀之助とは寝た。

焚火は絶やさぬ様に爲ねば成らぬので、目の覺めた者が其皮に投げる筈である。

秀之助は前後も知らずに眠りに入つたと思ふ間もなく、上から押冠さつて來る者が有るので、

「狼でも来たかと吃驚して眼を覺すと、寢像の悪い小九郎が、胴中を枕にすべく大きな頭を持つて来たのだ。」

それを突退けるのも可愛さうな氣がして、少時我慢して居る間に、焚火が消えさうに成つたので、如何してもこれは起上らねば成らぬかと考へて居ると、不意とお登女が頭部を擡げて。

「小九ちゃん、酔いわ。ボン／＼足で蹴飛ばして……。」と小言をいふ。

「貴女も遣られたか。私も此通り」と秀之助は聲をかけた。

「まア酔い事ねえ……如何にか仕ませうねえ」

「併し折角能く寝てるんですから、動かすのは可哀さうですな」

「然うですな。それに他へ遣るとしても狭いのですからねえ……。」

「矢張中に置いた方が好いでせう」

二人が斯うして話をして居ても、小九郎は少しも知らぬ。顔を踏まれても目を覺すまい。胸の上で四股を踏まれても、氣が着くまい。

「未だ夜明けまで間が有りませうから、最う一ト寝入り仕ませうよ。寢が……一審いけませんわ」

「然うですな」

焚火を盛んにして、それから小九郎の寢像を二人掛りで直して遣つて、再び右と左に横たわつた。

それからは如何しても秀之助は寢着かれぬ。お登女も亦眠られないか、何度も何度も寢返りを打つ様。

秀之助は一層の事、起きて了はうと思つた。然うして斯ういふ夜に於て問ひ掛けたら、お登女は身上を打明けて話しは爲ぬかと考へた。

彼の女の祕密が、かゝる深山の中に於て聞くを得られたら、最も其處を得て居る様に思はれて、意を決して秀之助は起き上つた。

「お登女さん」と一聲呼んで見た。

彼の女は此時、能く寝入つて居たか、其一聲には答へなかつた。

最う一聲、大きく呼んで見たら、無論眼を覺すのであらうが、秀之助には其種の勇氣を缺くので、酷く悄氣で、又寝て了つた。

「八三」

「曉近く成つて秀之助は漸く眠つた。又もや上から何物か押冠さつて来たので、寢像の悪い小九郎が再び頭でも持つて来たかと、吃驚して眼を覺して見ると、今度はお登女が胸の上に手を載せて、ゆすぶり起すのであつた。

「何事かと思つて秀之助は胸をドキ／＼さした。お登女は其顔を見て笑つて居る。其筈、夜は疾くに明けて居るのだ。」

「昨夜の雨は名残なく晴れて、朝日が谷底にも射し込んで、雨に濡れた岩壁を光らして居る。傘を持つ紅葉をも光らして居る。眼暈しい程である。

「あッもう夜が明けたんですか」と秀之助は言ふ。

「夜が明けた處では有りません、御飯も既う炊けて居ます。それから小九郎やんが大きな岩魚を釣つて来ましたから、鹽焼にして有ります。さアお湯にでも入つて、それから御膳を御上んなさい」とお登女は言ふ。

「贅澤な旅行だ。これでは宛然湯治場へでも來てる様な……」

「でも、昨夜は際分弱りましたわねえ」

「昨夜の夜道には、もう如何なる事かと思つて、實際心細かつたです。滑し、此所へ來て温泉に入つてから、悉皆好い心持に成つて了りました」

「でも、何んでせう、夜中に屹と眠れなかつたのでせう」

「如何して知つてます」

「だって途中で眠られなかつたので、曉方に成つて稍つと寢入られたので、それで寢坊を仕込んでせう」

「それに違ひは無いです」とは答へたが、それでも彼の呼掛けた時の事が思ひ出されて、目を覺して居りながら、返辭を仕なかつたのでは有るまいかと、つい、氣を廻しても見るのであつた。

「秀之助は温泉に入つて出て來た。三人で食事をしたが、岩魚の鹽焼の美味なる事非常である。全くこれは深山の特産。神は海岸の人のみに幸ひせぬと覺られた。

「怪童小九郎は相變らず大食した。でも鍋に残つた分は握り米飯にして、晝飯に宛てる事にした。」

此所を出發して、又昨日にも増さる嶮峻な個處を攀登つたが、秀之助は大分馴て来たので、昨夜程は二人に迷惑を掛けなかつた。

それでも深潭の横たはるのを、檜の木の倒れ木を渡して、其上を踏んで行く時や。岩崩れの水無しの瀧を登つて行く時などは、大分顔色を悪くして居た。

此日も九ツの山を上り下りし、十七の川を彼方此方と渡り、午後三時頃であつた、劍を立てた様な岩山の上に出た。

既うそれで止まりで三方は底も見えぬ深谷である。一方が漸く他の山に通じて居るだけだ。其所の出張つた處に、閻魔大王に似た形の大岩が、巖然として根を張つて居る。

『これが閻魔岩といふのですよ』とお登女は教へた。

『それは好いですが、之から如何行くのですか。もう何方へも行き様が無いでは有りませんか』と秀之助は心配さうに問ふ。

『もう此所で好いのですわ』

『えッ此所で好い？』

『此谷底に砂金があるんです』

『谷底に？如何して此所から降りるんです』

『それが爲の用意ですわ。太細を岩角へ結んで下げて、それを傳つて下へ降りるんです』

『誰が……』

『妾と貴郎と……』

『二人で……』

『小九ちゃんを番人に此所へ残して置くのです、然うしないと、山猿が出て来て惡戯をして、細を解かないとも限りません。能く岩茸取がソンの目に遭はされたてえ話が有りますわ。細の縁が切れたら既うどんな事をしても下から登れッ子は無いのです。本統の命の綱なんです』

【八 四】

『それでは、此太細に絶つて、二人は絶壁を降つて、砂金の有る處へ達するのですね、然うして小九郎を一人此處へ残して……』と我々の貴重なる生命は、小九郎が預かる譯なんですな』と秀之助は心配の度を強めて言ふ。

『然うです。此子が見張つて居れば大丈夫です』とお登女は答へて、更に小九郎の方に向ひ。

「お前は日本一の利口者だから、此處で一人番をして居るわねえ」

小九郎は臆で合點をして。

「番をして居る」と答へた。

「山猿が來ても大丈夫だね」

「うむ、大丈夫だ」

「それからね、下から合圖に繩をピン／＼と引張つたら、それを受けて一生懸命に手繰り上げてお呉れよ。お前は力が強いんだから」

「うむ、手繰り上げる。俺は力が強いんだから……」

「それは大事の砂金の袋入だからね、手繰り上げたら繩を解いて、又下へ下げてお呉れ。然うすれば又砂金の袋を縛り付けて上げるわ。それでお了ひには妾達が、繩に縋つて上つて來るから、然うしたらお前にドツサリ御褒美を上げるよ」

「うむ……」

やがて總ての荷を此處に下して置き、太繩を閻魔岩の前なる岩角に確固と結び付けて、其の端を谷底に垂らした。併し絶頂の岩は傘を開いた様に擴がつて居て其下はエグリ取つた様に岩

が削れて居るので、繩の端が何處まで達して居るか、上から見る事は出來ぬだけ、夫だけ想像が先走つて、此世からなる無間地獄。底無し井戸でも有るかの様。

小九郎は荷を下して軽く成つたので、元來し山の方へ焚火の材料を集めに行つた。其間に秀之助はお登女に向つて。

「此處に砂金の有る事を、小九郎に知られても好いのかね」

お登女は笑つて。

「力こそ、あの通り強いんですが。元來が馬鹿の處へ教育が少しも無いんですから、逆も此深い山を如何して通つて來たのだから分りはしません。二度と再び此方へは來られませんわ」

「でも、砂金の事を母親に話すでせう」

「あの母親は妾の事を、或る程度まで知つて居るんです。山奥に砂金の有る、それを妾が取出すてえ事は知つて居るのですから、大丈夫です」

「それならば好いです」

其處へ小九郎は枯枝を澤山抱へて來た。

「では小九ちゃん、屹と見張をしてお呉れよ」とお登女は再び念を押した。

「大丈夫だよう」と小九郎は心得顔。

いよ／＼お登女と秀之助とは、身支度して、出来るだけ身輕に成つて、空の米袋を二ツ三ツそれは砂金を入れるのである。それから小さな箆に小萬鍬、これだけを分けて身に附けた。

「さア妾が先きに降りますわ。後から貴郎入らッしやいですが、妾が降り切るまではイケませんよ。降り切つたら下からピン／＼と引きますから……それから決して岩の方に脊を向けてはイケませんよ。又手と足との間だけ見て、それから上下を見ッ子無しですよ。左右を見てもイケませんよ、好御座んすか。ぢやお先きへ」と言ふかと思れば、忽ちお登女は出張りの岩を交して、太繩を力に底知れぬ谷へ！

秀之助は之を見たいけで、氣が遠く成つた。逆も自分には降りられぬかと思つた。少時して下からピン／＼と繩は引かれた。

さア今度は自分の番か。

併し此危険は他人の爲ではない。

お登女は他人の僕の爲に危険を犯して呉れて居る。自分が自分の爲に行かぬといふ法は無いと決心して、太繩に手を掛けた。

八五

出張りの岩から降り掛らうとした時に、小九郎は、から／＼と打笑つて。
「此人は餘程臆病だなア。願えてらア。は／＼／＼」

續いて秀之助も谷底に向つて太繩から下つた。それ限り何の音沙汰も無い。

小九郎は焚火をしながら待つて居たが、退屈だと見えて欠伸びばかりして居た。

欠伸びは未だ好かつたが、後には閻魔岩の前に大の字に成つて午睡をしてしまった。それも好いが、焚火を其儘にして置いたので、其火が次第に燃移つて、岩角に結付けた太繩を焼かうと爲る。

其焼焦げを知らずに、下から太繩を引張らうものなら、それ切りだ。一度落ちた太繩を再び上に懸ける事は逆も出来ぬ。

いや、小九郎は夫處ではない。例の如く寢像が悪いので、狭い山頂を彼方へ轉がり、此方へ轉がり、宛然階子乗りの曲藝を演じて居る。

後には到頭出張りの岩の先きへ半分乗出して、既に一寸の狂ひで千仞の谷底へ轉落ちると見

えながら、猶知らずに鼻から提灯

其所へ意外にも人一個、後の一方の峰傳ひに來た。それは岩魚釣りの重助だ。

「やア、こら、小九郎ちやアねえか。危ねえ」と言ひつゝ、足首へ手を掛けて引摺戻した。

小九郎吃驚して。

「やア重助どんか。如何して來た」

「如何して來たかッて、お前、まア、如何して此所へ來てるんだ。おれは岩魚釣りが家業で、どんな山奥の谷川へでも入込んで、五日や六日家へ歸らねえ事は珍らしくねえのだが、お前まア如何して這んな處へ來たんだえ」

「うむ……用が有つて來たんだア」

「おれ、變な處に煙が見えるで、不思議な事も有るもんだ。滅多に人の來べき處でねえ閻魔岩の傍で焚火なんかして、如何したんだらうと思つて、わざわざ廻り路して來たもんだ。然うすると、お幹後家の馬鹿息子……はッはッはッ、お前が谷へ落ちさうに成つて寝てるぢやアねえか。天狗様に攫はれたのでもなからう。用てえなア、どんな用だえ」

「重助どん、お前又如何したんだえ。岩魚釣りは既う旬脱れたア。鐵砲でも持つて獵にでも來

たのなら分つてるが……變だなア」

笹滑りの重助、どきッとしたが、抜からぬ顔で。

「うむ、實は、此間中、釣り溜にして自焼にした岩魚が澤山方々の窟に隠してあるので、それを今の内取出して置かねえと、雪でも降ると大變だから、それでわざわざ來たんだよ」と答へた。

「然うかい。おれは又、重助どん、砂金でも探しに來たのかと思つたよ」と小九郎は何氣なく言つた。

「砂金！」と重助は思はず叫んだ。其時の舉動で以て言當てられたなと覺るのが普通の人だが小九郎には其様な智慧は無い。

「砂金？」と今度は重助の方から問掛けた。

「おれ、三人連で砂金取に來たんだせ。此下に二人下りてるんだ。若い男と若い娘とだせ。却却上つて來ねえや。ピン〜と下から繩を引いたら、上からおれが手繰り上げる事に成つてるんだ」とべら〜と小九郎は喋つて了つた。

「砂金が此下に有るのけえ」と重助の眼は鋭く輝いて來た。

「うむ、何んでもドツサリ有るんださうだ」
 「若い男と娘と……ふむ、それが此細で谷底へ降りたんだな。あッ最少して細が焼けるぢやアねえか」と兎も角重助は焚火のつゞきを踏消した。

「八六」

間魔岩の前から無間地獄の如き深谷へ太細に絶つて下つて行く秀之助。既に前にお登女が降り着いたのを知つて居るから、未だ幾分か氣丈夫だけれども、もしや途中で太細が切れは爲ぬか。或は又上から岩が缺けて落下しはせぬか。そんな事を考へると、顔へざるを得ない。救へられたる通り岩壁の方に向ひ、手元より上を見ず、爪先より下を見ず。少しづつ手繰つて降つて行くと、耳近く溜の音の聽える處がある。時としては雲が横から吹廻して身を包む事がある。斯う成ると、空中に浮かんで居ると異ならぬ。

秀之助は不圖飛行機の發明に就て考へ合せた。一本の繩が一個の人を吊下げ、一個の人はそれ自身の動力を有して、それを手繰つて上下する。此間に何か面白い應用を發見しはせぬかといふ、そんな心が途中で出たので、危険といふ事を何時しかに忘れて來た。

不意と何物か腰の邊に抱着いたので、秀之助は吃驚して氣が着いて見ると、既う深谷の底に降りたので、足が既う少しで岩に着かうとする處を、お登女が待構へて抱下して呉れたのだ。「あッ既う谷底……降りたのですか」と秀之助は夢から覺めた様な事を言ふ。

「何處まで降りて行くんです。これから下は谷川の水の中ですわ」とお登女は笑つて居る。全く然うである。絶壁の下に僅かばかりの岩床がある。それから先きは谷川と成つて居る。お登女が抱留めなければ中心を失つて、其方へ滑り落ちる處で有つた。

但し、其谷川の水は餘り深くは無い。底が見えて居る。其底は金色燦爛として人の眼を射つて居る。

「砂金！」と秀之助は知らずく大聲で叫んだ。

「如何です。虚言では無いでせう。光るのは皆んな砂金なんですよ」とお登女は説明した。「驚くべき砂金！如何して這んなに……」

「此所は不思議な處なんです。自然の砂金精煉所ですわ。大水の出る度に谷々から出る砂金を此方へ自然に押流して、此所へ自然に砂金だけ溜る様な水筋に成つて居るんでせう。それ、一段、二段、三段と、水の流れが溜に成つて落ちて居て、又其間に岩床が樋の様に掘れて居て、

途中で二ツに分れて、他の小石や何かは彼方へ流れて、砂金だけ此方へ溜る様に、立派な工學博士が工風した様な、自然の精煉場が出来て居るのです。こんな處が他に有りませうか。世界の何處にも未だ發見されて居ないでせう……いえ、發見されて居るとしても、こんな好い處を誰が滅多に發表するもんですか」

「實に驚きを通り越して居ます。大奇蹟ですな。他には恐らく有りますまい……他に類が無いからとて、此所を非定するのは考への悪い人です。類の無い場所が事實に於て有るので、以て初めて大奇蹟の一ツと成る。今でこそ日本は金に乏しいが、ズツと古い時の外人探檢家は、皆日本を黄金島と目して、其探掘を目的に東洋航海をしたとやら聞いて居ます。現在では砂金の本場はアラスカ方面と極つて居るが、昔は日本が本場であつたです。偶然では無いです。一體誰が此所を發見したんですか」

「あら、そんな事問うて……今は妾の祕密を探る時では無いでせう。砂金を探る時でせう。さア、いくらでも此策の中へ萬鐵で以て御搔込みなさい」

「八七」

斯う澤山に砂金が河底にあるのを見ては、難有味は非常に薄い様に感じずんばあらず。黄金萬能の世の中といふのは、此處の溪谷では通じ無い。

茲に於て秀之助はつくづく感じた。人間の生存は決して富を成すのみが目的では無い。いや、こんな事は少しく眼の有る者は皆認めて居るのだが、此處へ来て見ると又今更の如く然う感じられるのである。

此點に於て世の富豪、彼の大城の如き輩は眞に憫むべしである。幸ひにして自分は發明界の人と成つた。此土芥に均しき黄金を利用して、空中飛行機を完成し、世界に於て一番遅れて居る日本の飛行機。それを一躍して世界第一たらしめる愉快は最も光明なものである。眞の男兒が金つべき快事業である。實に自分は其人と思へば、身の幸福を喜ばざるを得ない。併し此幸福を授けて呉れたのは、怪少女のお登女である。

是は人間に非ずして正しく天女なのであらう。忽ち此處で姿を雲上に消すのでは有るまいか。それと同時に夢に成つて了うのでは有るまいか。

こんな考へをして居る間に、秀之助の手は無意識に、百圓に當り千圓に當る少なからぬ砂金を萬鐵で箆へ搔込んで居る。

「策の目から漏る様な砂金は面倒ですから、捨てお了ひなさい。大願のだけ持つて行きませう」とお登女も手傳ひながら言ふ。

場所はお登女も手傳ひながら言ふ。其處に身上の秘密な美少女を相手にして、河底から砂金を掬ひ上げる發明家。

人としては唯二人である。黄金の量は無盡蔵である。だが、一ツ此處に寒心に耐えぬのは、歸路で、只一條の太繩に縋つて元の絶壁を閻魔岩に登るより他に無い事で、過まつて其命の綱が切れたなら、二人は巨萬の富を眼前にして餓死するより他は無いのだ。

其活路の無いといふのからして、少しく此谷の地形を説かねばならぬ。抑も砂金のある谷川は極めて浅い。故に渡渉して向ふの岸に着くは何んでも無いが、向ふの岸とても此方と同じく大岩壁が聳だつて、それが長く列つて居る。翼なくしては登り得られぬ。假りに登り得たとしても、頂上は刃よりも鋭い。然うして又直に裏手は絶壁で、それを又降りねば成らぬ。降りた處で又登りとなる。斯くして益々山奥深く入込む事とは成る。

さらば谷川の上流の方はといふと、一段二段三段の小瀑布。それを如何やら斯うやら上つたとした處で、水深は大絶壁の下部に穿れて居る洞窟からで、其窟の中に入つた處で仕方が無い。

さらば下流はといふと、幾曲りして行く先が、百丈近き大瀑布の落口。

どちらに行つても助かる道は無いのだ。「さア既う好い加減に仕ませう。妾の目分量では、多ければとて足りない事は有りはすまいから」とお登女が言ふ。

心得て秀之助は、大願ばかりの砂金を米袋に入れる事にした。一顆々々見れば又更に驚かれる。帝室博物館の鑽石標本室にも未だ曾て見ない様な大きなのが、いくらでも有る。

袋ごと光る様な氣が爲る。枕程の小袋三個に砂金は一杯盛られた。一個の重量に驚く許り。如何に怪童小九郎たりとも、よも引上げ得じとは危ぶまれたが、試験である一ツ太繩の先に結んで、合圖としてビ

ンくと絲脈風に引いて見せると、待構へて居た様に、グン／＼手繰り上げる。「小九ちゃんはエライはねえ」と見上げながらお登女は譽め立てた。

果して怪童小九郎のみの力なりや。其處までの疑問は怪少女にも亦發明家にも浮ばぬ。

「八八」

大蛇が岩を傳う様にして、太繩は又下つて來た。二度目の砂金袋を結び付けて遣る。又引上る。又下る。三度目も前の如くして遣つた。

今度はいよく秀之助から先きに一大奇蹟を出で、閻魔岩まで上る筈で、太繩の下るのを待つて居たが、如何したのかそれ切り下されて來ぬ。

途中の岩角へでも引掛つたのでは有るまいかと見上げたけれど、上から笠の様に冠さつて出張つて居る絶頂の岩が見える位だから、然うでも無い事は直ちに分る。

「如何したのでせう」と秀之助は問掛けた。

「然うですね」と有繋のお登女も顔色を變じて答へた。

小九郎、如何かしたのでは無いでせうか」

「さアそれですよ。心配なのはそれですよ。御存の通りあんな子供ですから……如何氣がグ、出したかも知れませんが……併し母親もあれ程言つて聞かしたのです。それに妾には能く馴染んで居るんですから、まさか妾達を捨て先きへ歸りも仕ないでせう。事に因ると太繩が切

れ掛つたので、それを縛直して居るのでは無いでせうか」

「それだと好いのですが……兎に角呼上げて見ませうか」

「此高きですからねえ……まア併し無駄でも聲を揃へて呼んで見ませう」

二人は一齊に小九郎の名を呼立てた。それが聞えたのか如何か、出張りの岩の上から、ヒョククリ人の顔が出た。餘程小さく見えるが、それは小九郎では無い。

秀之助も吃驚したが、お登女の吃驚は夫れ以上だ。

秀之助は其人が何者たるかを知らぬが、お登女は知つて居る。曾て影澤の官林で一緒に成つた笹滑りの重助であるからだ。

扱は初めの内は小九郎に力を貸して、重い砂金袋を引上げたのだらう。悪い處を悪い人に見られたものだと、お登女は全くガツカリした。

上から覗き込んだ重助は、何やら大聲で言ふ様だが、能く聴き取れぬ。

「何んと云つてるのでせう」とお登女は秀之助に問ふ。

「チツとも分らない。聲だけは聞えるが、言葉として纏まつて耳に入りません……」

「おや……砂金……とか言つて居る様です……あッ風の所爲で大分……分つて來ます

わ

「おう……大分聞取れて来た」

上から来る重助の聲は。

「砂金の有る處を、おれは今日まで二十年も掛つて探して居たんだ……獵師も、岩魚釣りも人目を眩ます爲で、山奥といふ山奥を片っ端から探して居たんだが……お前達に先付けられて口惜しくツて成らねえ……併し、斯うして上る事の出來ねえ様にして置いて、おれは大きくて借區願ひを出して、先き手に廻つて了うのだ。おれの名前で願書さへ通過したら、其時はお前達を引上げてやらうよ……但し、其間が一月掛るか、二月掛るか、又十年掛るか知れねえから、それまでに餓死するか、凍死したら、お前達は持命がねえのだと諦めるが好いや」これを聞いたお登女は齒齧をして口惜しがつたが、如何する事も出来ぬ。秀之助も非常に憤激したが、仕方が無い。すると又上の重助は。

「それとも一思ひに死んだ方が好いと思ふなら、上から岩を投落して殺して遣らうよ。おれも好んで人殺しの大罪を犯したかアねえが、此大金の顔を見ては、一人や二人遣ッ付けるのは何んとも無くなつたア」と飽くまで兇暴なる意志の發表。

「八九」

無教育の山男、笹滑りの重助の事である。慾に掛つては人の命を奪ふなど、何んとも思つて居らぬのは當然。脅かして無く本統に危害を加へぬとは限らぬ。

何にも驚かぬお登女さへ、此谷底に降りて居ては如何する事も出来ず。顔色を失つて居る。秀之助も亦絶望しながら。

「ど、どうか命だけは助けて呉れ。砂金などは如何でも好い。此方には金銭上で替へられぬ大發明を抱へて居るのだ。僕の頭腦を今砕かれては、切角成功に近づいて居る空中飛行機の發明が滅茶々に成るんだから……命までは取らずに置いて呉れ、お登女さんとても大事な體なんだ。今更砂金などに執着しては居ないんだから、採掘の權利も何も恐くお前に譲るだらう」と聲の限り呼はつた。

上の重助は冷笑つて。

「巧く言ツてらア。そんな事言つて引上げさして置いて、上へ來ると又如何氣が變るか分つた

もんぢやアねえだ。それに何んだ、大發明だ。大發明をする人間なら、其處から此處まで上れる様に發明して見させえ」と怒鳴り下した。

「そんな事言はないで、如何か二人を上げさせて呉れ」

「何言かすだア。二人重なつて其處で往生しろ。それ、砂金の代りに大石を呉れべえ」と呼はつて、一抱へも有らうといふ大石を轉がし落す。

「あッ」と叫びながら秀之助は後へ身を引く。お登女と二人岩壁の根方にピッタリと身を寄せ避けて居ると、やがて大石は前の谷川へ大音響を以て落下した。

其飛沫は十二吋砲彈の海中に落ちた時と異ならぬ。二人は全身濡れた。

續いて大石小石、手當り次第に投落したが、幸ひに一ツも當らない。上部の岩が出張つて居るからだ。

「如何したら好いだらう」と秀之助は生ける心地が無い。

「なアに重助なんか投げる石で、命の捨て様が有りませんわ、そんな事は大丈夫ですが、二人這んなに濡れて……焚火をするにも生憎の谷底……夜に成れば凍へも仕ませう。六日や七日は水を飲んで生きて居られませうが、それから先きは迎も……それまでに誰か救ひに

来て呉ればですが、迎もそれは頼みには成りませんわ、よしんば又来て呉れたからツて、他人では砂金の有り場を知られて……それも困るし……二人の運命は全く極まりましたわ」

「如何にかしてねえ、如何にかして此處から上れないでせうかねえ」

「上れる見込が有る位なら、何も妾は情氣ませんわ……妾が絶望して居るんですから、よくの事ですよ」

「全體小九郎は如何したんでせう」

「分つて居ますわ。重助が締殺しでもしたんでせう」

お登女の口から這んな事を聞いては、益々秀之助は悲觀せざるを得ない。

其間、上からは既う石は落ちなく成つた。

重助は砂金を運びに去つたのであらう。

次第に深谷は暗く成つて来る。日の暮に近づいたのであらう。

どちらからも少時言葉無しで居たが、お登女は忽ち婉然として。

「ねえ、磯島さん、人間、死ぬると極つて見れば、既う氣が落着くわ。妾、斯う成るからには何んにも隠さないで、妾の腹の中から何から残らず話しますわ、貴郎も氣を落着けてお聞きな

らう』

『九十』

『飛行機を完成せしに死ぬるのは非常に残念ですが、其死の前に、貴女の秘密を聞く事が出来たら大いに慰められると思ひます』と秀之助も心の底から言出した。

『日本一の薄命者です。妾、本統に情無い身上なんです』とお登女は茲に初めて秘密の扉を開き掛けた。

場所は生き道の無い大深谷。人は死を覺悟の時に於て、怪少女の驚く可き身上話。

秀之助の神經は興奮して耳には如何なる微細の音をも聞漏さじと待構へて居る。怪少女は此時、石の如く身を堅くして、水の如く冷やかな血や流るゝ。

『妾の名は、戸籍面では、何んと成つて居ますか……大方、美登里とあるかも知れませんが途中から今のお登女で通して、妾を知るだけの人は、それで済んで居るのですよ。苗字は併し天津では有りませんの。三穂原といふのが本統なんです』

『三穂原が苗字ですか』

『それに就て、何か思ひ當る事は有りませんか。三穂原といふ苗字で……』

三穂原といふ苗字は多く無いので、それに就て秀之助は何も思ひ當らぬが。或は日露戦役當時に、その三穂原が問題に成りは爲ぬかと、臆氣ながら其邊までは考へたけれど、如何も能く分らない。

『何も思ひ出せません』と秀之助は言つてお登女の顔を見入つた。

お登女は、眼を對岸に向けて、山頂に夕の雲の懸るのを見上げながら。

『すべての國民が貴郎の様に忘れて居て呉れると好いのですが……いえ、唯忘れて呉れたのでは、何にも成りませんが……或時には三穂原の名を聞くと、其肉を啖つても公憤が散らないとまで、それは、前代未聞の憎しみを受けた、三穂原松作……妾は其娘なんです』と打明けた。

『三穂原松作！あッ、然う、三穂原松作とは、日露戦争の當時、國の秘密を賣つて、敵國の爲に働いたといふ、賣國奴』とつい秀之助も憤つて叫んだ。

『その賣國奴——露探と目指された者の妾は娘なんです』

『え、えッ、ま、本統ですか』

「本統に妾の父が露探でしたら、それは既う妾は生きては居りません。既に妾の母などは、早まつて自害して死んで了ひました。妾は此通り生きて居ります。それは父の冤罪を雪ぐ爲に……」と言つてお登女は今も悲憤の情に耐へぬ者の如く見えるのである。

「それでは三穂原松作なる人は、眞の露探では無いのですね」

「眞の露探が日本人の中に有つて如何しませう。全く父は誤解されたのです。いえ、誤解されるには又誤解される様な、不思議な運命も廻つて來ましたのですが、事實は露探どころでは有りません。軍事上の偵察には一方ならず力を盡したので御在ます。此事は妾の口から申しますより、近頃貴郎の御交際の荒根閣下に聞いて下されば、一番能く解けるのですが……然るに機會は再び有りませぬ。妾は貴郎と此谷底で、餓死して了うのですわねえ。黄金の中に白い骨が、貴郎のと妾のと、ゴツチャに成つて、いつまでも世の中へは出ないのですわねえ」

「九」

寢に驚動すべき話。お登女の身上に奇怪なる節の多からうとは考へて……、期……、思ひも寄らなかつた。賣國奴として世人から爪弾きされて居た三穂原松作の娘とは、意外千萬。

更に又意外千萬なのは、三穂原は露探に非ずして、却つて皇軍の爲に働いた者、それが或る錯誤からして、終に賣國奴を以て目されるに至つたとは、決して聞捨てに成らぬ事。果して夫が事實ならば、血の有る男兒は俠熱の爲に起つて、其冤を雪ぐに力を添ゆべきであるが……

「それで、三穂原松作……即ち貴女の阿父さんは、其後如何なされたか。社會からは無論非られて了ひ、其消息は杳として聞く無しでしたか……」と秀之助は問掛けた。

「父は必ず自分の冤罪を雪がなければなら無い。が、今は其時で無い、自分の冤を雪ぐ時には二三の大頭がコロリと飛ぶ。當分彼等を助けて置くのだと云つて、妾を深山の中に隠して居る間に発見したのが此所の砂金脈なんです」とお登女は語り出した。

「あッ貴女の阿父さんが発見したんですか」

「それから父は此砂金を資本にして、何か國家的事業を起す考へで御在ましたが、残念ながら病氣の爲に、死んで了ひました。母は其前に早まつて自害をして死んで了ひました。幼少の妾は大叔父に當ります、あの雲出谷の老人、あれは矢張三穂原の姓で、鐵臣といふのですが、あの老人に引取られて、東京で一二年暮しました」

「それが又如何して雲出谷へ……」

「甥の松作の冤罪が雪げるまでは、世の中を見ない。然うして火借りの宮に祈ると云つて、あの通り参籠して居るのですが、妾は厭で溜りませんから、父の遺言状や當時の秘密書類、それから此所へ来る道じるしなど残らず大叔父が持つて居ます、其中から此所への道しるへの記してあるのを抜き出して、先年此所へ来た事が御在ますの。其時の土産が、石の唐櫃の中の砂金なんです。他にもう一ヶ所小出しの場所が、影澤の官林の山神の祠なんですが……いえ、それも、妾一人では、如何して、取出せませんわ。昔の父の部下の者が、諸方に散らかつて居ますので、妾の姿をチヨイ／＼變へたり、居所が始終定まらないのも、其亡父の部下の處を廻つて居るからなんです。先年此所へ取出しに來ました時には、一軒家の主人、小九郎の父が生きて居りましたから、それに手傳はして此所へ下りました。今は死にまして、あの通り、母親が居るばかりです」と秘密の大體を語り了つた。

これから局部々に就て、細かに話して呉れたら、今まで奇怪に感じて居た事が、何の不思議も無く成るのであらうが、未だ其所までは至らずに居る。

濃霧漸く薄らいて、山影ところ／＼に見はるといふ趣である。

お登女は更に進んで、それを細説するかと思ひの他、今まで石の如く堅く成つて居た身を、何程かくづして掛つて。

「ですが……種々、妾、考へて見ましたが、女の身で、これだけの砂金を、有益に遣つて、國家的の事業を企てるなんて、逆も出来ませんわ。其片手間で父の冤罪を雪がうなんて、難かしいと考へて、誰か好い相談柱は無いか知らと、疾くから考へて居たのですが……」と今度は心の底を打明け様とはする。

日は次第に落ちて、谷底は山頂より早く暮に掛る。火氣一ツ無い處、寒さは肌に迫るに連れて、命の盡さるのが讀めるのである。

「九二」

一軒家のお幹はお登女の一行の無事に歸るのを待受けて居たが、三日目の朝早く表の戸を開けて居る處へ、茫然として小九郎が唯一人歸つた。

「あッ小九郎、能く戻つたねえ。お前だけ先さへ歸つたのかい。お嬢様達は後からいづれお歸りなのだらうねえ」と問掛けた。

「なアに……」と小九郎は答へた。

「それでは家へ寄らないで、直と東京へでもお出なされたのかえ」

「なアに……」

「それでは如何なされたの？」と早やお幹は氣を揉む。

小九郎は飽くまで平氣なもので。

「如何したか知らねえや」

「知らない？まア如何したんだい」

「如何たつて馬鹿々々しい。俺、縛られちやつたア」

「誰に縛られたのさ」

「重助さんによ」

「あッ重助さんに……」

「俺が好い心持に午睡して居る處へ来て起しやアがツた」

「何處で午睡して居たの」

「何處だか分んねえ。岩のある處だア。二人が俺を置いて谷の底へ繩を傳つて降りてね、俺に

番してろ、下からピン〜と繩を引いたら手繰れなんて言渡されたが、俺、睡く成つたから、寢てるてえと、其所へ重助が来て起してね、何しててえから、これ〜だと話したら、然うかと言つて喜んでの、俺が油断して居る處を後へ廻つて、ぐる〜巻に縛れアがツて、俺、涙が出る程息が苦しかつたよ」

「重助がお前を縛つたのかい」

「それで大きな、斯う人間見た様な岩へ俺を縛り付けて置いて、それからの、下から袋に入れた重い物を引き上げての、中は金だね。それから繩は既う上げ切りにして置いて、出張つた岩から下を覗き込んで、散々下へ悪口言つての、死んで了へとか、殺しツ了うとか、そんな事を言つての」

「重助が下の人を殺すツて？」

「おう、それから大きな石や小さな石を面白い程下へ投落して、もう之なら死んだべえツて、序にお前も殺すのだが、生かして置いても害にも成るめえ。山猿が來たら解いて貰へ。狼が來たら食つて貰へツて、重い袋を三度に運んで、何處かへ隠しに持つて行つて、それ切り重助は見えなく成つたよ」

「そ、それから、お前は、如何したの」

「俺、一生懸命に成つて、体で細の先を岩角に摺付けて、切つた」

「体が自由になつたのだから、太縄でも谷底へ降ろして、二人の衆を救つたか」

「なアに……」

「えッ救はない？」

「だって、もう殺しちやつたと重助が言つたから、俺、縄を降しても仕ようあんめえと思つて、一人でスタク／＼夜道を歸つた。もうあんな處へ行くもんぢやアない。阿母、腹が空つた。何か食はしてお呉れでないか」

「そ、そ、それは大變な事が出来て了つた。こりや斯うしては居られない。直にも其所へお助け申しに行かなければ成らないが、全體それは何處の山だい」と血相變へてお幹は問ふ。

小九郎は相變らず平然として。

「何處の山だか分つたもんぢやアない。俺、途中までは分つて居たが、先きは如何行つて如何したか、分りツ子はないや、行きには迷が有るし、重い荷があるので、手間取つたが、歸りには無茶苦茶で、夜道を斯う早く歸つて來たが、何んでも大變な處だ。おれはモー二度とは行か

ねえ。厭だアよ、阿母、探がしに行くなら一人で行きなよ」

「九三」

「そんな事を言ふもんで是有りません。お嬢様には、どの位お世話に成つて居るか知れないでは有りませんか。それ許りでは無い、阿父さんの代からお嬢様の親御様とは主従の様な間柄で來て居たんです。存命中には阿父さんも一度お嬢様のお供して、砂金取出しに行つた事が有るんですが、誰にも秘密だと云つて、女房の妾にも話しはなかつた。其時間いてさへ置けば今度も直に行けるのだが、まア、本統に困つて了う。全體どういふ風に行つたのだえ」とお幹は心も心ならず、身を預はしながら問詰めた。

「うむ、初めの間は分つてるよ。鴻の巢山から茶臼平へ出て、ガンシン川を彼方へ渡り、此方へ渡りよ。それから塔めぐりの峠傳ひで、それから又大分行つて……温泉の出る處で一晩泊つた」と小九郎は語り出した。

「おう、それは、火雨谷の温泉だ。あの日温泉泊りでは、大層面白い足だつたわ。もつとも若い人が足弱らしかつたから無理もない。それから先きは」

「それから先きは、口でも何んでも言へるもんぢやアない。如何したッて分りッ子は無い」
「何かお前目じるしが有りさうなもんだが……」

「おしまひの處によ、大きな人間見た様な岩が有つた、それが先づ目じるしだア」

「人間見た様な岩だと云つて、妾は能く知らないが、何んでも此山の奥には、仁王に似た岩もあり、鬼に似た岩もあり、それから三途河の婆あさんに似た岩もあり、又閻魔に似た岩もあるさうだから……其内どれに似て居たえ」

「さアどれだか夫が分らない。傍まで行つて見たら思ひ出すが……仁王の様だつたかな、鬼の様だつたかな」

「どちらにしても斯うしては居られない。支度をして探しに行かう。お前もお出で！」

「俺、厭だッてえのに」

「そんな事を言つて、大恩の有るお娘様を、お前は見殺しにする氣かえ」

「なアに既う死んで居べえ」

「死んで居らッしやれば、屍骸を引上げなければ成りません。又運好く石が當らないで、助がつて居らッしやるとしたら、少しも早く谷底から引上げて進せなければ、……」

か、どちらかに極つて居ます。さア早く支度をおし。大恩人の爲ではないか。それに又お前、能く働けば種々と珍らしい御褒美が頂けるよ」
お幹は急立て、食料、燃料、太繩など用意して——家を締切つた儘、小九郎と二人で飛出した。

「石が好い具合に當らないで生きて居らッしやるとしても、昨夜は嘸お寒かつたらう。又お腹もお空きなさいましたらう。それに附けても憎いのは笹滑りの重助。如何して遣らうか、今度此方の形が附いたら、直にも訴へて……だが、又砂金の事を警察の方へ知られては……」
ア何んにしても重助の奴、出會つたら唯では置かれぬ」とお幹は口惜しがる。

「おう、今度彼奴に會つたら、おれも敗けては居ねえ。昨日は不意打だつたから縛られたが、今度は油断しねえ。鉦で以て向脛、かッ拂つて呉れべえよ」と小九郎も憤慨。

斯くして二人は山奥深く分入つたが、日本アルプスに續いての高山系、上野と越後と信濃との三ヶ國に跨る大山林とて、何處に二人が居るのやら、却々分らない。

「はてな、道が遠つたか知らん」など肝腎の小九郎からして不安心である。

「九四」

「能く氣を落着けて考へて御覽よ。一度通つた路なのだから、思ひ出したら分るだらうがねえ」とお幹は泣聲に成つて言ふけれど、例の小九郎の事である。一向思ひ出しさうも無い。

「同じ様な山や谷や、それが幾個も有るんだもの。然う巧く思ひ出せるもんぢやアない。斯うと知つたら何んとかシルシでも附けて置くんだったよ」と今更智慧を出しても追着かぬ。

彼方へ迷ひ、此方へ迷ひして、其日の夕方近く瀧のある下まで進んだ時に、向ふから仙人の様な人が來るのに出會つて、吃驚した。

頭部を白布で包んで居る白髯の老翁。白衣、白袴。鐵履を穿き、肩に大瓢箪を懸け、手に自然木の杖を持つて居る。場所が場所だけに如何しても人間離れがして見える。

お幹も小九郎も吃驚して了つて、口も利き得ずに居ると、老翁の方から聲を掛けて。

「好え處でお前達に逢つた。道に迷つて困つて居る」と此方から言はうとする處を向ふから言つた。

「あッ妾達も困つて居るので御在ます」とお幹は答へた。

「おう、然うか。それは實にいよく以て途方に暮るなア……………お前達は何處へ行くのぢや」

「何處と云つて、それがハッキリ分りませんので……………」

「ふむ、似た様な身の上ぢやな。全體お前達は何處の人かな」

「妾達は此山の手前の、鹿平の新開地の一軒家の者で御在ますが……………」

「ふう、然うかな。それならば問うて見るが、近頃其邊に十五六の娘が姿を見せは仕なんだか」

「十五六の娘と仰有ると……………あの美しい活潑な……………」

「然うぢや、色は少し黒いかも知れんが、眉から眼から、何から何まで綺麗に揃つた美しい娘ぢや」

「それでは、お登女様と仰有るのでは御在ませんか」

「そのお登女と稱して居る娘ぢや。それを探しに霧山の奥、大寶殿嶽の山中に分入つたが、道しるべの書いた物をお登女が持出した限持つて戻らぬので、大方の見當は知れて居りながら、如何も迷つて困つて居るぢや」

「それではお噂に承はつて居りまする雲出谷とかの大叔父様は、貴郎で御在ますか」

「それまで知るお前は……………もしまつ三穂原松作の部下の……………」

「左様で御在ます。久保竹五郎の後家と遺子で御在ます」

「それではお前達もお登女の行方を探るのであつたか」

「左様で御在ます。實は斯ういふ譯で御在まして」とお登女と秀之助と二人で來た事、小九郎と共に出發した事、笹滑りの重助が慾心を出した事、残らず語つて。

「然ういふ譯で御在ますで、少しも早くお助け申さねばなりませんと、此通り母子でこれまで參つたので御在ますが、どうも行手が分りませんので……」

「や、して見ると、未だ神々は我等を見捨て給はぬ、この大深山の中で縁故の有るお前達とめぐり合ふといふのも、人の行くべき道は大概極つて居るからぢや。それに就て話がある。最少し先きに其笹滑りの重助とかに、わしは出會つた」

『九五』

笹滑りの重助が未だ此邊にうろ／＼して居るのは不思議である。後から發した小九郎でさへ一旦鹿平まで戻つて、それから又此所まで出直して居るのだ。或は三袋の砂金を運ぶので二度

目を取りに戻つたのかも知れぬとお幹は考へた。

雲出の老翁は語次いで。

「わしは其重助とやらが、そんな悪い事をしたとも知らぬから、幸ひ好い處で人に出會つたと道を問掛けて見た處が、その重助とやらも、實は道迷つたといふ。常に山獵や岩魚釣りで通ひ馴て居る處ぢやが、今日は如何したのか薩張り分らぬ。實は昨夜から歩き通したがと、キヨロ／＼しながら行つて了つた。併し其迷つたと云つたのは虚言かも知れんな。あの脊中に負つて居たのは、それでは砂金の一部でがなあらう。憎／＼き奴ぢや。さア、後を追うて引ッ捕へて、お登女等の居る谷へ案内させ様」と敦固くのである。

「それでは、妾達は、荷を此所へ置いて体を軽くして參りませう」とお幹は小九郎と共に山に出たので。これは一種の信念を有する敬神家の生粹なる人には、感感を得て起つならひ少

抑も雲出の翁が如何して此大寶殿織へお登女を探しに來たかといふのに、夢枕に立たれた火借の宮の御神告に、お登女の身上に危難が罹つて居るから、早く行つて救へといふのに驚いて山を出たので。これは一種の信念を有する敬神家の生粹なる人には、感感を得て起つならひ少

それで中野の里に松倉を助ねたら、お登女の消息が知れるだらうと、真先に行つた處が、それは砂金を取出しに、これくの次第と打明けたので、それならば行先は大寶殿に極つて居ると、早速此方へ向つた譯。

酒さへあつた食物は入らぬ人。肩の瓢箪はそれである。

翁が先立に成つて重助の行方を追うて急ぐと、間もなく谷川の深淵の有る處へ出た。

「やア、此所に居るッ」と翁が叫ぶ。

此所に居ると言つた處で、重助の姿は見えぬ。如何したのかとお幹も小九郎も不審を打つ。

翁は深淵を指し示して。

「此所ぢや〜」

近寄つて覗いて見ると澄み切つた水の底に重助は沈んで死んで居る。斯うなると悪人ながら可哀さうだ。

岩から岩へと飛んで向ふへ渡らうとして、踏損じて深淵へ落ちたのであらう。空身なら無給上れるのだが、慾張つて重い砂金を背負つて居た爲に、其重みで不覺を取つたと見える。

好い氣味でもあるが、不憫でもある。翁も同戚と見えて。

「や、未だ時間がそんなに経過してらんから、助かるかも知れん。引上げて遣らう」

「如何か然うして遣つて下さいませ。蘇生らした其上で、お磯様達の行方を言はせませう」と素よりお幹に否やは無い。

翁は早速杖を水中に入れて、柄頭を重助の脊の荷の間に引掛けて、グツと引上げた。水底の

重助は浮いて来た。

翁は襟筋を撥んで、水面に顔を引出しながら。

「此奴慾張つて、や、重い砂金を背負つたもんぢや。さア、手傳つて呉れ。わし一人の手ではいかん」

お幹と小九郎とは左右から手を出した。

「九六」

三人掛りで深淵から笹滑りの重助を引上げて見ると、脊中には果して少からの砂金を袋の儘結び付けて居る。此重みで浮く事が出来なかつたのだらう。慾の爲に死んだかと思ふと、餘り多くの同情は拂はれぬ。

「斯うして死んでる處は餘り好い顔ぢやアねえや」と小九郎さへ笑ふのである。

「如何でせう、蘇生りませうか」とお幹は問掛けた。

「左様、時間が未だ経過して居らん様ぢやから、介抱したら蘇生るぢやらう」と雲出の老翁は答へて、逆さにして水を吐かせ、腹を押し、背を撫でなどする。

お幹は小九郎と共に焚火を始めたので、それに又暖めなどすると、運の好い奴で重助は、息を吹返した。其處へ瓢箪の酒を一口飲まして。

「如何ぢや。しツかりせえ」と翁は一喝。

重助は唯眼をバチ／＼として居る許り。

それでも一時間ばかりしたら、大分元氣に戻つたので、早速詰間に及んだ處が、全く罪を悔み、自分の生命を助けられた恩返しに、二人の居る處へ案内すると、砂金は其所に置放してお幹の荷を助けながら先きに立つた。

夜道も大分歩いたが、危険なので途中で一泊して、朝早く又出發し、午前之間魔岩の前に到達した。

少しも早く谷底へ降らねば成らぬ。先づ其前に救ひに来た事を通じなければ成らぬと、重助

をして岩の上から覗き込ませて。

「雲出の御隠居や、お幹さんやで、救ひに来たぞーおれも善心に立復つたから、安心しろよ」と呼ばしめた。

下からは何の答へも無い。もしや變事でも有りはせぬかと、一同の顔には愁ひの雲が浮び出た。

其間準備が出来たので太繩に縋つて下る一段と成つた。

「妾が行つて見ませう」とお幹がいふ。

「いや危ないから、おれが行く」と重助も言ふ。

「でも、お前さんは、お二人には信用が無いのだからいけない、又危害を加へに来たと思はれては、どんな間違ひを生せぬとも限らないから、矢張妾が行く」とお幹は争ふ。

雲出の翁は二人を制して。

「わしが行く。二人は上にて待つて居らッしやれ」と言出した。

「いくら御壯健でも御老人の事ですから……」とお幹が言ふ。

「老人でも、なアに、飛行の術を研究して居る。お登女よりは、わしの方が飛べる」と翁は力

味かへる。

「だッて、此谷底へ飛んで降りるでねえだ。繩に縋つて降りるんだから、お年寄には危ねえだ」と重助まで留めに掛る。

「其様な事を言つて争ふべき場合で無い。一刻を争ふのぢや」と言ひつゝ老翁は早や太繩に手を掛た。

「あッ、それなら、その瓢箪は置いて入らッしやいまし」とお幹がいふ。

「や、これを置いて行つては、萬一、二人が絶息して居る場合に、酒を飲まして、元氣を附けるのに困る。これさへ有れば醫者も薬も入るもんか」と言ひつゝ大瓢箪と共に老翁は下つて行く。

下から吹上げる山風は、白袴の裾から白衣の袖、白袴までを逆さに立てる。

全く元氣は壯者を凌ぐ。今の若い者は意久地が無いと言はれても仕方が無い。

既に七八分位まで下つたかと思ふ頃に、定めなき高山中の氣象。白雲何處よりか飛來つて、谷底一面封じ渡り、翁の姿もそれに没して見えず。

お登女嬢は如何して居られるか。逆の若い人は如何して居られるか。如何か無事で居て下さ

れとお幹は一心に神に祈る。

小九郎は又重助に向つて。

「お前、此所へ、おれを縛り付けたんだな。不意打だから敗けたんだが。今日は阿母も見てるから大丈夫だ。どうだ、一番、取組合ふか」と威張り出す。

重助は苦笑ひして。

「もう、そんなに云つて呉れるな。全くおれが悪かつたんだ」

『九七』

さすがに雲出の翁である。巧に太繩を傳つて谷底へ難無く降りた。然うして聲高く。

「美登里、いや、お登女、迎へに来たぞ」と呼はつたが、何の答へも無い。唯、水音の岩に立つて、砂金の光が眼を射るのみ。

老翁一方ならず心配して、四邊を見ると、重助が投落したらしい大岩小岩が、岩床の上に散亂して居る許り。

併し之に當つて怪我でもしたなら、血が流れて居らねば成らぬが、それが見えぬ。或は他に

活路を見出して、其方へ行つたのかと、川上の方に歩き出して見ると、岩壁の根方に洞穴がある。

此所だと思ひつゝ覗いて見ると、果して此中に二人、落葉や流れ木を掻集めて、其上に横はつて居た。

「こらッ、わしが遙々探しに来たのに、寝て居るといふ法があるか。ちやから如何も今の若い者はイカン。それに男女七歳にして席を同じくせずとあるに、石の枕を並べて寝て居るとは、怪しからん事ぢや」と洞穴一杯の聲で吐鳴つたが、起き上らぬ。

其譯だ。息が殆ど絶えて居るのだ。

席を同じくするも何も無い。浮世離れのした深谷の中に、衣服は水に濡れて居る。火の氣一ツ無い處に、殆ど二晝夜、それも飲まず食はずに居たのだから、斯うなれば禮儀も作法も無い。別して戀愛も性慾も何も無い。

唯少しでも長く生きんが爲に、體温を保つ事を工風したに相違ない。

併し夫も失敗に終り。刻々迫り来る饑餓と寒氣との爲に、一方は亡父の宛を雪ぎ得ざる怨恨。一方は發明の成功を見ざる怨恨。互ひに怨恨を抱いて黄金の溪谷に倒れた譯である。

それと知つて翁は吃驚した。先づお登女を抱起して、胸に手を宛て見ると、未だ温か味がある。

「えいッ！えいッ！えいッ！」と氣合を掛けて、脊筋を膝頭で、トン！

ハツと氣の着く處へ、瓢箪の口を附けて、ぐツと一口飲ました。興奮劑を與へた譯である。

「あッ！」と叫んでお登女は眼を見開いたが、未だ口が利けぬ。指の先で秀之助の方を指し示すのみ。

「心得た。分つて居る。女のお前でさへ蘇生したのぢや。男の方は然う急がんでも好え」と言ひつゝ、翁は又秀之助を抱起して、前の如く介抱して、活を入れ、酒を飲ました。

「あッ！」と叫んで秀之助も正氣に復した。

「や、氣が着いたら、もツと酒を飲めえ。酒々、酒が何よりの藥ぢや。酒で元氣を附けえ。さア飲んだ。さア飲んだ。わしも喜びに一杯遣る」と翁は瓢箪の口から瀧呑みである。

「如何して貴郎が………妾達は死んで居るので、それで斯うした不思議が見えるのでは有りませんか」とお登女は疑ひをさへ生じた。

秀之助も其心はあるが、口を利くまでには回復しない。唯不思議さうに見廻すのみ。

「やア、そんな事ではいかん。もつと飲んだ。さア酒で一ト元氣附けて、兎も角も此谷を出なければ成らない」と翁は連りに酒をすゝめるが、空腹の極に、飲みつけぬ酒。氣は引立つたが、眼が暈出した。逆も上へ登る處では無い。

然うして正氣づくと同時に、又寒氣を猛烈に感じて來たので、お登女と秀之助とはブルブルと顔を出した。翁もこれには困つて居る處へ、心配して後から重助が降りて來た。

重助の顔を見て、二人は更に吃驚するを、翁は制して。

「降は後に話すが、もう此男も善心に立歸つたのぢや。安心して居るが好い。さア何しろ、まア、焚火をせねば成らん。火打石を持つては居らんか」

重助は急いで燧寸をすつて、集めてあつた落葉に火を附けると、薄暗かつた洞穴、赫と明るく成つて、鐘乳石が花電燈の如く輝いて見える。

「九八」

焚火に暖まつたので、お登女も秀之助も大分元氣附いて來た。重助も昨日は斯うした風で助けられたので、今日は人の身上、燃やす材料を探し廻るが、谷底の狭い岩床、思ふ様に木の葉

は集まらぬ。

それよりも二人に粥か何か食べさせねば、逆も太細に縋つて岩壁を登る事は出来まいと、重助をしてそれ等を取りに上らしめた。

其後で翁から、神の御告げの夢枕から雲出谷を出て、中野の里に松倉を問うた事。山中で道に迷うた事。お幹等にめぐり合つた事。又重助の上に就ても委しく説明したので、すべての不思議が二人に分つた。

翁は連りに神の貴とさを説き、その御靈夢を喋々するが、それは心象學上の説明で言ふと、靈の感應である。今に科學上の説明が充分に出来て見れば、不思議必ずしも不思議で無いに至らうが、先づ今日では神の存在を認め、其お告げが有るとして置くも亦一解説で有るかの様に秀之助は考へた。

やがて重助は。銅や米や燃料や、種んな物を背負つて降りて來た。

下で急いで粥を作つて二人に食べさせたので、益々元氣が附いて來た。

何んにしても間處岩まで上らねば成らぬ。お幹も嘸心配して居るであらうと、勵まして一人一人太細に縋つて登らしめた。

お幹はお登女及び秀之助の無事な顔を見て、涙を零して喜んだ。直にも下山すべきであるが、何分にも二人は疲勞して居る。二三時間は暖かく静臥させて置く必要を認めて、閻魔岩の前に毛布を敷いて、二人を眠らしめた。無論側で焚火を盛んにして。翁は瓢を大分軽くするまでに飲んだ。重助も相手をして少し酔つて來たので、自分が二人を死ぬ苦しみに陥らして置きながら。

『どうも一日半と二晩ばかり、飲まず食はずで居たからツて、斯う体が弱るものではない。だから今の若い者は駄目だ。俺が五六年前に裾紅川の谷底で、岩魚を釣つて居た時に、不意の出水で如何する事も出来ず。三日三夜窟に籠つた事が有つたが、何んとも無かつた』と自慢し出した。

『それは時候は何頃です』とお幹が問ふ。

『夏だつたよ』

『夏ならば凍へるといふ事が有りませんが、秋と云つても山の中は冬も同然。況して谷底へ火無しで居ては、凍へて溜りませんよ。それにお前さんが石を投落したので、衣服は飛沫に濡れて居たらうしねえ』

『なる程然う言はれて見ると、俺は燐寸を持つて居たので、窟の中で焚火をしたツけ。夏でも山の奥では焚火が無いと、夜は寒い』

『ですもの、お二人が死に掛けたのも無理では有りませんわ』

重助は全く降参した。其間二人も漸く平常に復したので、いよいよ出發。無駄な荷を捨て了ひ、重助が他に進んで隠して置いた砂金を取出して、六人が分配して、人相應に擔ぎ、一先づ鹿平を指して急いだ。歸路は往路ほど困難では無いが、砂金の重さには秀之助、聊か弱つた——弱りながらも之で發動機が買へると思へば、いくらでも我慢が出来るのである。

「九八」

一先づ鹿平のお幹の家に歸着した上で、更に評議を開く事にした。

重助には砂金の内の一部を與へ、其代り産出地に就ては秘密を守らしめる。猶又正當に採掘する場合には、相當の利益を分配するべく言明かした。

それで雲出の翁、お登女、秀之助の三人は、急いで東京へ歸るに就て、却々砂金が重い處か

ら、小九郎をも連れて行く事にした。

山中では格別目に立たぬが、これが町村に出で、更に都會に入ると成ると、奇怪極まる行列である。少くも明治の香の爲る者は一人も居らぬ。別して雲出の翁の扮装と來ては、太古の人に近いので、汽車に乗るのが似合はぬ位。

秀之助も之には困つたが、途中は如何も仕方が無い。責めては東京に入る時間だけでも、夜にしたいと、其事をお登女に相談した。

お登女も至極賛成した。

途中別に異變もなく、豫定通り夜に入つて上野に着いたので、電車にも乗らず四人徒歩で、水道橋畔の日立齋伯の家に入つた。寢に齋伯の家は今回の事件の中心と成つた。策源地といふべきである。

齋伯は砂金の成功で大喜び。これから秀之助が中野の家へ歸つては、又出て來るのが面倒だから、明朝松倉と壽男とに此方へ來て貰ふ手筈に仕様とて、急いで書面を作つて、書生に持たして走らした。

此夜は齋伯邸は大入大繁昌。蒲團が足らぬといふ騒ぎ。

併し山中では毛布一枚で寝たり。後には濡れた儘落葉の上にさへ寝たのを思つて、お登女も秀之助も平氣であつた。

雲出の翁に至つては更に平氣で、書室の椅子の上に端座した儘、眠りに入つた。宛然御神體の木像の様だ。

明くる朝に成ると、松倉と壽男とが飛んで來た。書室に入つて皆の顔を見るや否や。

「やア實に大成功、萬歳大萬歳！世界を驚動せしめる前には、必ずそれ丈の大奇蹟が伴ふ筈だ。大奇蹟を探り得るのは大偉人でなければ成らぬ。此意味に於て我がお登女嬢は大偉人である」と賞め立てる。

壽男は嬉しさに兄の顔と砂金の袋とを等分に見て、大顆の涙を零して居る。

「此所までは妾の力ですが、さア之からは磯島さんの骨の折れる番ですわ」とお登女が言出した。

「勿論です。いよく之で飛行機の製作に掛り、大飛行をして見ねば成りません。これからの私の責任が實に重大であるといふ事は自覺して居ります」と秀之助は言ふ。
松倉は進み出て。

「如何でせう、一方に於て之だけの資金が出来たのですから、發動機買入の他に其剩餘金を以て、一大製作場を建築し、それから飛行機の練習場を造つたら如何ですか。最早や中野村に於て居る場合ではなからうと思ふですが」と相模原が突飛である。

「や、一大製作場だの、練習場だのと、そんな大仕事な事をするには、又も生死を賭して山中へ砂金取出しに行かなければならない。そんな大仕事は兎も角もとして、あの通り中野の家は、最早や各方面から注意されて居るで、此際他に轉じるといふ事は、最も良策と考へるですか……」と秀之助が言ふ。

日立齋伯は椅子を進めて。

「それに就て僕に名案がある」と口を開いた。

『百』

「如何いふ名案ですか」と松倉は一同に代りて問掛けた。

日立齋伯は、すらりと一通り、一同の顔を見渡して。

「發明は成功するまで秘密でなければ成らぬ。どうも代々木の練兵場や、或は又所澤の飛行練

習場などで遣ると、見物も大勢来るし、第一又、新聞に日々記事を出されるので、随分と蒼蠅い様に考へられる。就ては僕、極めて秘密に、それが製作され、又練習の出来る處を知つて居るので、加之多少手を入れれば、飛行機の格納庫ともなる建築物さへ附屬して居るので……」と語り出した。

「それは何處ですか」と秀之助は乗出す許りにして問入つた。

「や、然うして都合の好い處を、如何して僕が知つて居るかといふに、それ、僕は書家である。人の餘り行かない方面に向つて着目して、寫生旅行を能く企てたもので……其時見て来て頭に殘つて居るのだが、それは相模原といふ處なんだ」

「相模原？」と松倉は叫んだ。

「彼の東神奈川から八王子へ行く横濱鐵道の、淵野邊といふ驛がある、其所で降りて行くと、廣い草原がある。これは誰でも知つて居るが、其中に不思議な一區劃があるです。それは一時、競馬が流行して、諸方に競馬場が出来た、其熱に矢張浮かされて出来たので、馬繋ぎ所もある。又粗末ながら觀覽所もある。其所を手を入れて一部を製作場に、一部を格納庫に宛てる……ね……如何です、競馬場を飛行機の練習所に宛てる……相模原の中だからコン

コソ遣つて居る分には見物だつて然うは来ない。第一、新聞記者先生が来て呉れないだけでもどの位好いか分らない」と語り了つた。

これ以上の名案は無いので、忽ちそれと一決した。

競馬場借入の件は、猶好く荒根將軍に相談して、將軍の手から地主に掛合つて貰つたら好からうなど、其方に就て又種々考案も出た。

雲出の翁は此際困つた事を言出した。

「機械で空を飛ぶなどと、其様な事が出来るもんで無い。わしは既う然ういふ山掛つた事は大嫌ひぢや。當り前ならお登女にも、そんな仲間へ入らしめるのでは無いのぢやが、行掛り上、今更仕方が有るまい。わしは大目に見て置くが、併し、兎も角もお登女は、一先づ雲出谷まで歸つて呉れねばならぬ。三七日の間は山籠りして、火借の宮の神靈にお禮を申上げねば、如何も成らん。實に今回の事を見ても、神様の貴とさが分つたであらう。是非お禮の爲め連れて歸る。誰が何と言ふても、これ許りは肯かぬ。

頑固な事は岩石以上の翁の事であるから、逆も言出したら引かぬと見て取つて、それなら資めて七日だけでも行つて來たら好からう。其間に淵野邊の方を準備して置く。飛行機の組立が

出來たなら、望みの通りお登女を乗手として、十分に練習をして貰ふといふ事に話を纏めた。それで、行きは飯田町から汽車、お登女は女學生風を纏うて行く。歸りには八王子から横濱鐵道に乗つて、淵野邊の停車場で降りる事にして、七日目には誰か一人出迎へに出て居るといふ、斯ういふ手順にした。

「百一」

汽車の中では別々に乗つて居ても、淺川驛で降りてからは、古代の老人と現代の少女と、如何しても一緒に行かなければ成らぬ。

併し此邊の人は生神様として雲出の翁の事を知つて居るので、格別怪しまぬ。寧ろ其後から行くハイカラの女學生の方を訝り見た。中にはお登女を見覚えて居るものも有つて、益々妙に疑ひ出した。

雲出谷の七日は、活潑に飛んで歩く習慣の附いて居るお登女をして、酷く弱らしめた。が、漸く願明けに成つたので、お登女は早速飛出さうとしたが、老翁は引留めて、何彼と難かし

い事を言出して困つた。

辛うじて山を出て、浅川から汽車。八王子で横濱鐵道に乗替へるつもりの處、延着で大分待たなければ成らぬ。

構外へ出て、四邊を眺めて居ると、これも同じ様に待合せて居る銃獵家が二人。一人は若い色の白い、人品の賤しからぬ紳士で、獨逸式の獵服。銃丸帯を締め、皮ゲートルを穿いて居る肩には銃を分解して、皮袋に納めたのを掛けてゐる。一人は其従者か。髭を生して居るが、甚だ調子の低さうな男である。

一目見てお登女は知つた。若紳士は月野毛公爵である。

公爵は又お登女を一目見て、其美に打たれたか。それから眼を放さぬ。瞬きするのも惜しむ程で、お登女を中心にして其周圍を、ぐる／＼と廻つて許り居る。

變な人だとお登女は氣味を悪く感じて來た。もしや玉川の、あの時、自分が船で出て來たのを、記憶して居るのでは有るまいか。いや／＼あの混亂の中に一寸顔を出したばかり。それに今とは扮装も違ふなど、そんな引け目の考へさへ生じて來た。

其間、横濱鐵道が出る頃と成つたので、急いでそれに乗るべく構内に入り、陸橋を渡つて、

歩廊へ行くと、矢張彼の人は後から附いて來る。

急いで三等車に乗ると、それには公爵も當惑した。

従者らしいのは一等車の方へ行掛つて、公爵が躊躇して居るのを見て、これも立留つた。

公爵は意を決したか、従者に密語した後頭頭三等車に乗り、お登女の側に座を占めた。赤切符で一二等へ乗る不徳漢は、澤山有るが。白切符で三等に乗るのは滅多には有るまい。

やがて汽車は八王子を出た。

「貴女は何方までお乗りですか……」

公爵と此方が知らぬと思ふて、それで馴々しく話すのであらうと、お登女は腹の中で冷笑ひつゝ。

「淵野邊まで参ります」と極りの悪さうに答へた。

「あゝ然うですか。私達も淵野邊あたりへ行つて見たいと思ふのですが……あの邊には雉子山鳥など、如何ですか、澤山居ませうか」

「さア如何で御在ませう。妾は初めて参るので御在ますから……」

「あゝ然うですか。初て……すると貴郎は八王子の方ですか」

『いえ、東京で御在ますが……八王子に一寸知つた家が御在まして……それから淵野邊にも御在ますので……』

『あ、然うですか……東京は何方ですか……』と段々委しく問掛けられるので、お登女は困り出して居るの時、汽車が好い鹽梅にトンネルに走り入つて、激しい音響に話聲を掻消して呉れた。

鈍い車燈の下。窓の隙間から煤煙が吹き込んで、彼方でも咳、此方でも咳。

「百二」

此様子では月野毛公爵、淵野邊停車場で一緒に降りるかも知れぬ。然うして、何處までも自分の後を附けて来られぬとも限らぬ。然う成つては大變で、秘密の練習場を知られては、折角隠れて爲る事業が、實際前に發表されて、どの位利益だか分らぬと、お登女は早くも意を決して、汽車が淵野邊驛の一ツ手前なる橋本驛へ着くや否や、不意に下車した。

『あッ』と言つて公爵は餘りの突然に驚きながら、直と後から飛降りた。

驚きの最も度の強いのは従者——これは發明家の一人で、曾て玉川の競技會で秀之助に喧嘩を吹掛けた頭株、前崎である。

前崎は香久子の紹介で、此頃公爵に取入つて、半は替間の如くして、それで發明の保護を得ようと試みて居る。

これも續いて飛降りながら。

『社會の事情に迂い人が、戀に熱すると眼中他に何者も無く成るんだから恐れる。常識の判断なんか有りや仕ない。すべて世の中は自分の心の儘の様に思つて居られるのだから、何をされるか分つたもんぢやアない。之は今日のお供は大變だ』と答す。

公爵はお登女の後を追掛けて行き。

『貴女は淵野邊で降りると云つて……此所は橋本では有りませんか。間違つて降りたのですか』と問掛けた。

お登女は澄まして。

『橋本にも一寸用が有りますのですが。貴郎こそ淵野邊でお降りになる筈では有りませんか』と遣り返した。

『其つもりでしたが……急に降りたくなりました』と言ひつゝ、後から何處までも従ふので

ある。
其又後から苦い顔をしながら、前崎が従うて行く。加之公爵の銃まで擔がされてゐる。
公爵は後を振り向いて。

「前崎、お前は成るべく後からお出で。間隔を置いて……話の聞えない程の距離を保つて……」

「はッ」と言つて前崎、お受けをした。

既う公爵、それから後へは振り向いても見ない。連りにお登女に話しながら行く。

お登女は酷く迷惑しながら、仕方が無い。枯野の中の一木道を、淵野邊の方に向つて歩きながら、好い加減の事を受け答へて居る。

すべて此邊は相模ツ原の一部で、不毛の地として長く見捨てられて居たので。従つて人家など殆ど無い。最近に汽車が通じたので、漸く驛前に二三戸の家は建つたが、汽車の發着でも寂しいもので、三四人乗降するのが關の山。されば街道なども、滅多に人の行來は無い。公爵には夫が嬉しくて成らぬ。思ひの儘に少女と語る事が出来るので、殆ど身の何者なるかをさへ忘れたる形である。

後から行く前崎は大不平。

「此位距離を置いて歩くと、二人の話は耳に入らんが。其代り此方の悪口も向ふへは通じまい。何か喋りながら歩かなければ詰まらなくつて、溜つたもんぢやアない……何しろ貴族といふ者は違つたもんだ。今の殿様は却々利巧で、昔の馬鹿大名の様な事は無いけれど、せも、餘程我々とは寸法が違ふ。あの美人を追廻すにしても、餘りに短刀直入的で、あれではイカンな。や、美人と云へば、如何も何者だらう。全く此邊には珍しい美人だ。色は少し黒い様だが、人をチャームする、言ふに言はれぬ處がある……あ、あッ、横へ二人曲つて了つた。あッ、手を取り合つた。怪しからん、後から空砲を撃つて驚かし遣らうか」

百三

お登女とても勿論世間的人では無いが、月野毛公爵の出世間の態度には驚いた。常識で考へて、極りが悪いとか、耻かしいとかいふ事は、全然眼中に無い。自分が斯うと思つたら、其通りに仕なければ承知せぬ。又世の中は總て思つた通りに成し得るものと、斯ういふ自信を有して居るに相違ないと見た。

寔に公爵はお登女の見た通りで、途中で逢つた少女が、如何なる素性の者であらうが、何であらうが、交際を結びたいと思つたら最後、何處までも後を追うて目的を達せねば已まぬのである。

既に今日まで、此流儀で押通して、公爵の榮位と、其高雅なる態度とのツペりした容貌と、或る程度までの金力とで、大概目的は達しられた。それが幸ひにして先が穩和であるだけに、一旦破裂の場合にも、格別手を焼く程の事は無しに過ぎた。茲を以て益々得意で、野花を愛でる心は増長し行く許り。

舊臣の内、薄々此亂行に心を痛める者が無いでもなかつたが、然ういふ者は又野外へのお供を命じられぬ。お氣に入りて連れて行かれるのは、前崎の如き詰問紳士である。

今日も八王子で見出した野生の美花。これには又一入感興を催して、熱度が頗る高い。並び行く間に、公は慣用手段を出して。

「私は貴女と交際しても、決して耻かしい身分で無い事を言ひ得ます。従つて貴女の満足を購入するには、如何なる條件でも辭せないのですが、御都合で私の別荘へまで、お遊びに入らっしゃいませんか」と言掛けた。

「妾の様な者と御交際あそばすと、屹と御後悔なさると存じます……」が……別荘拜見……伺ひますのは、願つても無い事です……どちらで御在りますか」とお登女は問うて見た。待構へて居たといふ風で。

「別荘は鎌倉にも有ります。日光にも有ります。それから鹽原にも有ります。東京近くでは戸黒にも有ります。が、此處から一番近いのは神奈川にも有りますから。何んなら之から汽車で神奈川へ行つて見ませんか」

「まあそんなに御別荘が……それでは貴郎は……」と初めて氣が附いた様に粧うて。「もしや華族様では居らっしゃいませんか」

斯う來るのを待つて居たと許り。「決して私は華族では無い。或る貴公子に似て居るといふ噂は度々聞かれますが、私は一個の平民に過ぎないです。神聖なる友情の前には、爵位も何も無い……私は月村照美といふ者です」

言ふ事が馴れた者である。若い華族の中には世馴れた人が少くない。藝人通人と敢て異らぬ程の人が有るとは聞いて居たが、斯うまでとは意外で有つた。則ち出世間の中に一部の非常に世間的の處がある。撞着した性格が羽二重ズレの本領であら

う。

お登女は斯う成ると困つて了ふ。それに未だ困つたのは、何時しかに枯野の中を淵野邊停車場近く来た事である。

如何かして公爵を時かうと思つても、それが出来ぬ。益々言寄るのが濃厚に成つて来たのでいざと成れば突飛しても走るまでだが、成るべく先方の名譽も尊重して、然うして圓滑にわかれたいと、一寸のがれの事を言ひながら行く間に、いつしか驛前の廣場に出た。

此處で出迎への誰かゝら、言葉を掛けられては、いよく面倒。それから感附かれて練習場でも發見されては一大事と思つて。

「あの妻の訪ねます家は、此方ですから……一寸失禮致します」と言捨て、小走りに横路の枯尾花の間に分入ると。

「私も其方へ」と何處までも蒼蠅い。
訓練せられた會話以外は、確かに非常識の人である。

「百四」

何處までも附いて来る公爵。否、月村照美と稱する平民の、根氣の好いにはお登女も驚いた。

折曲つて枯尾花の間を分けて行くと、運悪しく古池の端に出た。路はそれで盡きて居るので、引返へすより他には無い。

其歸路には非常識の人が立塞がつて居て。

「や、今まで貴女の言ふ事を信じて居たが、悉く虚偽でしたな。橋本に知り人を訪ねると言ひながら、到頭淵野邊まで来て了ひ、此所では又此方に知人が居るなんて、曲つて来て見れば行留りでは有りませんか。つまり私の好意を解せないで、私を時かうくと企てゝ居るんですな」と聲を顔はして詰るのである。

「いえ、全く土地不案内からです。此方の事は能く存じませんと汽車の中でも申しました。有りませんか」

「それなら私の好意を受けて、一緒に神奈川の別荘まで来て呉れますか」
「それは貴郎、御無理で御在ます」

「でも分らない家を探して居ると、直き日が暮れます。然うしたら東京へ歸るのが大變ですよ。」

「こんな寂しい處で夜に成つたら、どんな恐ろしい者が出て来るか分りませんよ。それより汽車で神奈川まで出て居らっしゃれば、それからなら夜遅くまでいも、汽車や電車が有ります。此所は既う六時か七時が終列車で、それから先は如何しても歸る事は出来ませんよ。第一泊る宿屋が無い筈です、さア私と入らっしゃい、悪い様には仕ませんから……」

野菊に蔦草が搦んだ儘枯れて居る。蔓梅の實を枯尾花の穂が風に連れて撫つて居る。古池の小魚は底深く沈んで、藻の下に隠入つた。

此時銃丸の如く飛んで来たのは、怪童小九郎である。

「やッお嬢様、どの位待つたか知れねえだよ。それなのに、此方へ急に駈込んで、何するだえ」と呼はつた。

「あッ人、人違ひ……だわね……妾はお前を……知る譯ないわ……」とお登女は目顔で知らせる。

「好い處へ来て呉れたには相違ないが。又秘密を保つ點から考へると、悪い處でもある。

小九郎は此呼吸を呑み込める様な賢いのは無い。

「お嬢様に相違ねえだ。そんな事言つて白張ツくれしないで、さア早くお出で。えらい物が出来

掛つたせ。大きな紙齋を見た様な物が……」と手を引いて連れて行かうとする。

會て玉川の園遊會では、日立齋伯の爲に秀之助が見あらはされた。同じ行方でお登女は苦しむのである。

不思議と見て取つた公爵は。

「なにッ、大きな紙齋……」と聞答めた。

お登女はこれまでと覺悟して。

「小九郎、お前、此人を押へて居てお呉れ。妾、逃げるわ。姿が見えなく成つたらお前も突飛ばして置いて捕まらない様に逃げてお出で……」

「何ッ……」と言つて公爵は、お登女を捕へ様とする。小九郎それを遮切つて。

「好し来た。俺、引受けた。早く逃げなよ」

「何んにもお前、お喋りで無いよ」と言置いて、お登女は元來し方へ走り出した。

小九郎の方で抱留められた公爵は、逆も動かれぬ。従者たる前崎は、すつと連れて居る。忽ちお登女の姿は見えなくなつた。既う好からうと小九郎が、公爵をトンと突放した。餘りに強く突放したので、古池の中へさんぶり！威威は全く落ちた。

『百五』

月野毛公衛は銃獵に出掛けて雉子を追うて走る時に、つい足下を見なかつた爲に、古池に落ちて顔面を負傷した。斯ういふ觸込で目黒の別荘に寝て居られる。

それを見舞に來たのは大城香久子である。例の自働車を走らして來たのだ。

公衛は大喜びで。

「能く來て下さいました。他の人ならお目に掛らないのですが、貴女ですから失禮ながら病床でお目に掛ります」

香久子は寢臺脇の椅子に腰を掛けながら。

「どうもお危ない事で御在ましたねえ」とは言つても、いつも程の優しさを示さぬ。

「どうも獲物に氣を取られて馬鹿な目に遭ひました。既う雉子撃は懲りました」

「お懲りに成りました方が宜しいでせう。雉子が餘りに美し過ぎましたからねえ」

「雉子が美しい？」

「左様で御在ます、餘りに美し過ぎましたので八王子から橋本、淵野邊の方まで追うて入らッ

しやいましたさうで……」

「あッ……知つて居ますか！」

「妾は何んでも知つて居ります」

「それでは前崎が喋つたのでせう」

「あの人は秘密の保てない人で御在ますわ」

「怪しからん男だ。あれ程口留をしたのに」と公衛は縋帯まで染まるかと思ふ程眞赤な顔をして怒つた。

「いえ、御安心なさいまし。妾だから實は申したのです。又妾だから白状もさせたのです。それに就て實は妾もお話が致したくつて伺つたのですが……」と言ひ掛けて香久子は聲を潜め。

「女學生風に化けました少女は、どうも話の具合ですと玉川の彼の競技會の時に船で出て來たのに似て居ます様で……」

「さア後で私も前崎から聞いたですが、然うらしい様で……」

「それですと妾の方には未だ思合せる事が御在ますので……妾が彼の霧山郷から、決死隊と共に出て參ります時に、途中で半死半生に成つて居りました娘巡禮が御在ました。それを妾が

救つて遣つた事が御在りましたが、後で聞きますと、それが、まア、驚くては御在ませんか。少女の癖に強盗殺人放火、悪事は悉く仕て居るといふ大悪人で御在まして……」

「えッ強盗！殺人！放火！」

「それを知らずに妾は救つて遣りましたところが、其少女が……何んでも、あの天津風之助と偽り稱して飛行機の發明家、磯島といふ男や、松倉といふ無頼書生と結合しまして、又何か悪事を陰謀んで居る様に考へられますが、閣下は其毒悪なる畏にお掛りなされたのでは有りませんか」と何處までも自分が好い顔を爲ねば納まらぬ。

「あッそれで思ひ當りました。淵野邊の池の畔で怪しい少年が出て来た時に……妙な事を言ひました……えらい物をこしらえて居る……大きな紙鳶の様な物云々……して見るとあの淵野邊の附近で秘密に飛行機でも製造して居るんでは無いでせうか」

「全くそれで御在ませう。彼の磯島といふのは、既う中野の方を引拂つて何方へ去つたか分らないので御在ませう……」

「と直ぐにも人を出して、あの邊を搜索さして、其製造所を突當めて彼の少女に復讐を……」

「まアお待ちなさいまし……それには妾も考へが御在ませうの……」

「どういふお考へですか……」

「お耳を拜借致しますせう」

唯二人のみの室内、耳にさやく必用も無いのに、他くまで秘密がる處が、すべてを誇大視する人の癖。

「百六」

月野毛公爵と大城香久子とが共謀して、お登女及び秀之助に復讐しやうと成つた。その方法を豫め定めねば成らぬ。何よりも先づ何處で飛行機を製造して居るか、秘密を突留めるのが急務である。

それに其探索の任務を前崎に命じる事にした。

前崎も掛り合である。それに自分も亦飛行機發明家の一人なので、競争者が其處まで進んで居るとすれば、却々油断は仕て居られぬ。宜しい、相模ッ原がいくら廣くても、片ッ端から歩いて探しませうと大憤發。

變装するのに都合が悪いとて、髭まで剃落した。斯うまでにして働くといふ處を見て貰つて、

従つて運動費を餘計引出さうといふ、好く無い胸算用。

前崎は毎日百姓の買物に行くといふ扮装をして、天秤棒の先に小布呂敷を結付けては横濱鐵道で出掛けて居た。

却々以て発見されぬ。十日ばかり立つたが、未だ発見されぬ。それといふが、時には行つた振をして、行かぬ時もあるからである。

公爵の怪我も全治したので、それでは自分が自働車に乗つて、相模ッ原を乗廻すと言出された。

これは大變と前崎も、いよゝ本氣で探し出した。

或日、淵野邊から東南の荒野原に入り、舊競馬場の方に向つて初めて目的を達した。製作所は瀟觀覽所の一部。三四人の姿が見えたけれど、誰と誰だか、遠目だから分らぬ。近寄れば先方から見出される。それで日の暮るのを待つて、密と其製作所に忍込んで見た。

秀之助も居る。其弟も居る。松倉といふ書生、お登女といふ少女、それから公爵を古池に投込んだ少年も居る。

夜業までして大勉強だ。

覺られぬ様に小屋の板圍の外から、密と窺つて居ると、然うとは知らず中では秀之助の聲として。

「實に天佑とでもいふのですな。最新式の發動機が横濱のリーベン商會に近々到着する筈ださうで。然うすれば巴里への電報料も助かり、第一その到着するのを待つといふ不便も無いので……」と言出した。

「皆、將軍の御注意からです。我々はどの位閣下に感謝しなければ成らないか知れんなア」と松倉の聲。

「従つて飛行機の方も大急ぎで製作しなければ成らない。忙しい〜」と薄男の聲。

「早く製作して下さらないと。妾、練習する事が出来ませんわ」とお登女も言ふ。

「どうか、まア出来上つて、巧く飛行の成功するまで、誰にも知られたくないもんですわ」と幸ひにして今日までは分らずに來た。

此時まで無言で居た怪童小九郎は突如として。
「變な奴でも見に來たら、俺、ぶン殿つて、生かしちやア歸さねえ」と叫んだ。
これを外で聞いた前崎は戦慄して、這ひながら逃出した。

逃出しながらも心の中で探偵は大成功。先づ復讐の手段としては、リーベン商會へ駈付けて發動機を此方を買つて了ふ事。

第二の復讐手段としては、舊競馬場の地面を買つて、早速彼等に立退を命じる事。

これだ、斯ういふ報告をすれば、大城家からも公爵家からも、少からぬ賞與が得られる事と大喜び。つい、夢中に成つて走つたので、淵野邊驛へ出るまでに、三度轉んで、最後には向脛をスリ剃いて、痛くて成らぬ。跛足引きながら駈付けて見ると、終列車は疾くに出た後。宿屋は半里も後戻りせねば無いとの事。おや、。

「百七」

淵野邊の原中、舊競馬場の跡に入つて秘密に飛行機の製作に従事して居る磯島等の動靜を探り當てた前崎は、髭まで剃り落した効がある大喜び。併し終列車の間に合はなかつたので、翌朝の一番で東神奈川に出で、それから先づ大城令嬢香久子に報告し、自動車で同行して、月野毛公爵を訪うた。

第一策として早速リーベン商會に着荷すべき發動機を横取すべし。金力で出来る事なら同處

までも夫を張通すべしと大乗氣。

第二策としては、淵野邊の村長に向つて、公爵の名義を以て威嚴を示し、場合に由つては競馬場全部の地所を買つても好い。然うして彼等を追立てるべしと、總て前崎の持出した策略通り。

早速先づ横濱に、香久子の乗つて来た自動車を借りて前崎が向ひ、リーベン商會を訪ねた處が、それは既う今朝、手金を受取り、賣買の契約が成立つたから、たとへ何増倍の代價を拂はれても、それを破約に爲る事は出来ぬ。もし必用なら同一の品を早速電報で取寄せ様との事。第一策は見事に破れた。

此上は第二策。立退き請求であると、いよく月野毛の手紙、大城の名刺、高價な贈り物、種々の資道具を以て前崎が飛んだ。

其結果として三日月の正午頃、村長某は、舊競馬場に向つた。

とは知らぬ磯島兄弟、其他は殆ど徹夜で製作に従事し、大分その組立が進行して居る處へ、村長が来て氣毒さうに立退きを要求した。

折柄見廻りに来て居た荒根將軍が立出て。

「何んぢや、立退けちうのか」と雷の如き大聲。
「え、其、甚だ恐縮ですが……立退いて頂きたいので……」と村長は既う氣を呑ま

た。
「それア何故ですか？」

「え、近々賣りますので……」

「近々賣れる？それア怪しからんぢや。わしは軍人で地所の事なんか委しくは知らんけれど……」

……全體此競馬場は、村有地といふ事ではないか」

「へえ、左様で……」

「それを賣ると成ると、個人のと違つて、手続きが却々面倒なと聞いて居る……果して其
手続きは完全に履行されたのか、如何か」

「そ、それは何んで御在ます。いづれ其村會も開きまして、又其、種々手続きを何んで御
在まして、登記なども一寸面倒で御在ますで……急に其、今が今といふ譯には……」

「然らば、いよく手続きを完了して所有權が他に轉じた場合に立退きを請求するのが至當だ
と、わしは思ふが、如何か。今からそんな急に立退きを命じるなんて、怪しからん。わしは馬

政局の人の紹介で順序を踏んで此所を借地して居るでは無いか。荒根が此所を借地しとる以上
は、然う急に無法の立退きを要求しても、應じる事は、斷然ならん！」

『はッ……』

「村長、能く考へて見給へ。空中飛行機の製作といふ事は、個人の利益問題ばかりぢやアない
よ。實に國家的問題ぢやよ。斯うした荒蕪地に於て、世界に誇るに足るべき飛行機が製作され
るといふ事は、此土地としても名譽ぢやアないか」

『お、おようで……』

『まア能く考へて見給へ。金銭上のみの利益を考へないで、理想の爲にも人間生きさへしぢや。
話が分つたら引下り給へ』

將軍の爲に見事第二の策戦も撃退された。

『百七』

村長が立退きの要求に來た事が、餘りに突然の出來事なので、之には何か事情の有るのだら
うと、松倉が例の突撃主義で、村役場の役員某を捕へて聞いて見た處が、果然、月野毛公爵、

大城銀十郎、前崎などの名が出て来たので、扱は香久子が蛇の如き執念で、公爵と共に復讐を企てたのに相違なからう。既に彼等に然ういふ敵心の有る以上は、此方も油断はすべからず。然うして少しも早く飛行機を完成させて、充分飛揚の経験を積んだなら、いよいよ世間に發表して、先づ日本に於ける飛行の新記録を作る爲に東京灣橋断でも試みるべしと、非常な意氣組。十二月に入つて漸く磯島式飛行機の組立を完成した。單葉式にして横巾十米突、全長九、四米突。プロペラーもピッチも特種のもので、細密の説明は——秘密である。

ノーム式發動機は無事にリーベン商會から手に入つたので、早速其据付を了つた。待構へて居たお登女は早速運轉座に乗つて、最初は滑走の試験である。

試乗の第一日は、荒根將軍も日立畫伯も、朝早くから来て、何彼と手傳ふ。松倉や壽男や又小九郎までが、秀之助兄弟に力を添えて働くのは勿論の事。

お登女は別に飛行服を着ない。斯ういふ時には山中に入つた毒消賣の紺装束が好いとて、其扮装で乗つた。機に對して妙な反映である。

其結果如何？發明は果して成功か。或は不成功か。秀之助の心は悉く之に向つて注がれて

居る。他に何物も無い。

最初は發動機の運轉開始である。先づクランクがスターチング把手で廻されると、ピストンは下方に動く。シリンダー内の容積を増大して、吸氣弁を自然に開き、汽化器からガソリンの蒸氣と空氣とを吸込まして、ピストンの上方に動く時、壓迫に由つて發火器が發火して、ガソリン資料が爆發する。

非常に大きな音響と共に機は早や滑走を始めた。思はず一同は喝采をした。

これからの責任は飛行家たるお登女にある。滑走中から早や幾度となく飛行に轉じ機と爲るのを、巧に操縦する手腕。これが初めて乗つた人とは思はれぬ程である。

勿論それまでには。乗方に就て荒根將軍が、書籍及び其他の記録に由つて研究されたわけの事を、殘らずお登女に語り聴かせ、又昇降舵、方向舵の使用法に就ても、充分秀之助から説明してあるので、方法は既に分つて居る。此上は大膽と機智と、それで遣れば好い譯だ。

滑走試験に於て見事に成功。競馬場を一週して無事に起點に歸着したので、いよいよ今度は昇騰試験と成つた。

抑も此磯島式飛行機は、如何なる風力にも耐え得るといふのが、他よりも優秀の第一儀なの

であるので、今しも吹出した西北風にも、一向氣を配らないのである。
「乗つてると本統に面白御在ますわ。さア今度はいよ／＼空中へ飛びますよ」と亂れ毛を搔
上げながらお登女は非常な元氣。

「おう、お登女嬢は實に飛行家の天才ぢや。しッかり遣つて呉れ給へ！」と荒根將軍大喜び！
これが巧く飛行するまでは、秀之助の重い／＼責任は肩から下りない。

「百九」

滑走試験に續いて、いよ／＼飛行試験の場合と成つた。例の如くお登女は、愛嬌溢るゝ笑を
湛へて座乗した。

滑走凡そ六七十米突にして、忽ち飛行機は空中に浮んだ。

「やッ飛行！飛行！大萬歳！」と松倉團彌眞先に叫んだ。

「兄さん！兄さん！飛んだ！飛んだ！」と壽男が續いて叫んだが、秀之助は飛んだだけでは滿
足せぬ。如何なる飛行振を爲すかと瞬きも惜しんで見詰めて居る。

お登女は大膽に然して巧妙に、熟練したる飛行家の、それに少しも劣らず。五六十米突の高

さを保つて、競馬場の上を一週し始めた。

「愉快！愉快！磯島君、良好ぢやぞ！」と荒根將軍が叫び出した。

「正しく成功！安定も申分無い。速力は未だ充分に出て居ない様だが、此突風を物ともせず、
えらいなく」と日立壽伯も口走らす。

「最初から此飛行振は、見事々々。あれ／＼あ／＼して乗つて居るお登女嬢の姿は、寔に天女に
異ならんな」と將軍は又呼はる。

「磯島君、あの飛行機に命名し給へ。羽衣號と命名し給へ」と壽伯も口を閉ぎ得ぬ。

一時間五十哩の速力の割合で馬場の上を三週して、無事に飛行機は着陸した。

物をも言はず秀之助は、眞先に走り寄つて、機を下つてお登女と握手した。

嬉しさの絶頂！互ひに涙さへ浮べてゐる。

「兄さん！」と叫んで壽男は抱着いた。

「おう、弟！」と秀之助も壽男を抱込んだ。

思へば夢の様！

此處に居る者一團と成つて、祝しつゝ、喜びつゝ、泣いた。嬉しさの極は涙である。

小九郎は一人呆れて居て。

「不思議だなア。いよ／＼人間に翼が生えるんだな」と密語いた。

今日は先づ此位にして、翌日更に大飛行を試みる事に定め、機を格納庫に引入れて置き、それより大祝宴を製作所内で開く事とした。

大祝宴と云つた處で、總勢僅かに七人である。村で賣る地酒をシャンピンとも見立て、砂皿に煮縮の山盛。お登女が白鳥を持つてのお酌に、皆、飲むわ／＼。

併し荒根將軍は最も真面目なる態度を以て、磯島兄弟の發明の成功を祝し、更に又お登女の飛行術の成功を併せて祝した。

秀之助はこれに對し、將軍、齋伯、及び親友松倉の少からの援助と同情とに對し深く感謝し。又お登女が砂金を提供して呉れた事に就て厚く禮を述べた。

此位和氣緩々たる宴會は、他に有るまじとまで見えた。

「さア此上は、いよ／＼社會に向つて發表ぢや。翌日の飛行の結果で、富士山乗越しも好からう。東京灣横斷も好からう。武藏野一週も妙ぢやらう。それがお登女嬢の操縦で成功した時が三種原松作君の汚名を雪ぐべき時である。嗚呼愉快な日が段々近寄るぞ。今日は大いに飲むべしぢや」と荒根將軍大變な御機嫌！

「百十」

荒根將軍も日立齋伯も非常に酔つたので、つい歸京するのが遅れて、辛うじて終列車に間に合つた程。

後では又一連り祝盃を舉げたが、斯ういふ時に油斷しては成らぬ。既に月野毛公爵又は大城父子が激意を持つて居るのが知れた上は、どんな卑劣な手段をめぐらして妨害を加へぬとも限らぬ故、格納庫の中に當直を置く必要があると、一同相談の上、お登女は明日大飛行をするのだから、睡眠不足では失敗の基。今夜は十分に眠る様にとて、當直外とし。秀之助の次ぎが小九郎、其次ぎが松倉、夫から壽男とが、二時間交代で番をする事にした。幸ひに何事もなく夜が明けた。其處へ一番汽車に乗つて既う將軍と齋伯とが遣つて來た。

製作工場、兼居住所に入るや否や、將軍は大聲で。「いよ／＼面白い事に成つて來たぞ」と呼はつた。日立齋伯も數葉の新聞を打振りつゝ。

「競争者が突如として出現したぞー」と呼はるのである。

「競争者？」と秀之助先づ叫んだ。

「まア新聞を読んで見給へであるが、手取早く話して見ると、米國から最近に來た飛行家のマルスといふのがある。彼は興行的に飛行機に乗つて世界を金儲けに歩いてるのであるが、それを如何いふ了簡でか、月野毛公衛が大城銀十郎等と共に招聘して、池上の競馬場で飛行させて、無料で衆人に觀覽させやうといふのぢや。其口實に曰くさ。我國の幼稚なる飛行界に一刺戟を與へるといふ譯なんぢや。然うして第二日には羽田の運動場を起點として、東京市を横斷し、向島の白蠶の連場動へ降下するといふ。この日は入場料を取るといふ。それは併しマルス氏に賞金を呈する爲だといふのぢや。何んだか變ぢやね。這んな興行的の飛行家と競争するといふのは好ましい事では無いけれど、我國初めての飛行、東京市横斷の記録を外國人の爲に作られるのは残念ぢやから、一番不意に出て、當日其速力を競ふのぢやな」と將軍は語つた。

「勿論です」と松倉が叫んだ。

「や、それは面白や。社會に、我が磯島式飛行機の羽衣號あるを發表するのに、最も好い時機と思ひますから、當日乗出して見たいものですね」と秀之助も乘氣である。

「妾、大城の關係して居る事なら、何んでも向ふへ廻つて見ますわ」とお登女も非常に勇んで居る。

「さア斯うなれば今日の大飛行ぢや。一回でも餘計に練習して置く必要があるのぢやから、ア、少しも早く飛行を開始すべしぢや」と將軍の言葉に一同武者振ひの出るを覺え、急いで格納庫から羽衣號を引出した。

昨日から見るとお登女は益取扱ひ馴て來た。

いでや、ブレリオ式が作つた一時間六十三哩のレコードを破り呉れむといふ意氣組で、出立を切つた。

爆發の聲。プロペラの回轉する音。すさまじき音響を残して滑走を始めた。忽ち飛行に移つて、見る／＼三百四五十米突の高さを行き。更に又降下して、二三十米突と成り。其代り速力は今や一時間六十餘哩を出すかと思つて居ると、發止！何處に故障を生じたか進行は停止された。「あッ」と叫ぶのは一齊であつた。

無慘なる哉、お登女を載せた羽衣號は、桐一葉の散る如く落下するのである。

百十一

磯島式飛行機羽衣號の墜落したのを此方から見一同。機の破損は修繕が出来ようが、お登女の一命を失つては、取返しが着かぬ。

あの高さから落下しては、迎も一命は覺束なからう。たとへ息は有るとしても大怪我をしたに相違あるまいと、悉く顔色を變へながら、其方角へと走つた。

直き其所だと思つたが、却々有る。以て速力の優勢を窺ふに足る。彼は一里足らずも原中を走つた。

健足の松倉が眞先に到達して見ると、機は無惨にも枯草の上に顛落して居る。血が唐紅と見ると、それは蔦紅葉だ。

お登女嬢は如何したかと思つて見ると、其所には見えぬ。

ハテな？生死に關らず此羽衣號の傍に居らねば成らぬのだが、それが見えぬとは思議千萬と、其邊を探し廻つて居る處へ、秀之助が來た。壽男も來た。小九郎も來た。將軍も來た。番伯が一番遅れて來た。

手分けをして探して見たが、お登女の姿が如何しても見えぬ。

して見ると無事なのであらう。怪我も仕ないので、自分で歩いて何方へか行つたのでは有るまいか、と樂觀説も出た。

いや、機が此所へ落ちるまでに振落されて、意外の處で死んで居るのでは有るまいかといふ悲觀説も出た。

此時壽男は一聲叫んだ。

「あッ此所にお登女さんのだらう。櫛が落ちて居ました」と拾ひ上げて叫んだ。

それと同時に、少し離れた村道の方を探して居た松倉が。

「ヤッ自働車の通過した後が、附いて居る」と叫んだ。

「それでは若しや何者か、自働車で、此邊へ來て居て………それに負傷したお登女さんを載せて走つたのでは有るまいか」と秀之助も叫んだ。

「それが普通の人ならば、自働車で醫者の處へ走らして呉れるのは有難いが、もしや敵意のある者ちやア有るまいか」と將軍は心配し出した。

「あッ然うですな。月野毛公爵か或は大城か。どちらかの自働車で有つて見ると、これは容易

ならん事です……………或は其我々の飛行振を見る爲にどちらかゞ自動車で、何處かに来て居たかも知れんすな」と衛伯もいふ。

「お登女嬢を彼等に奪はれたとしたら、どんな危害を加へるか分らない。まさか殺しも仕なからうが、それ以上の惨忍を人格の上に施さんとも限らん。僕、これから後を追掛けて取戻して来るッ」と松倉は呼つて駈出さうとした。

「まア待給へ、自動車の後を徒歩で追掛けたッて何にも成らん」と將軍は留めた。

「なにッ膽力が養成して有りますッ」

「膽力でも之ばかりは、如何もならん。まア待給へ」

「へえ……………」

「自動車でお登女嬢を連れて行つたとすれば、極めて、容易に発見する事が出来る。何故ならば、日本に於ける自動車の数は知れたもので、片ツ端から調べても多寡が知れて居る。況んや月野毛か、大城か、どちらかの自動車だらうといふ見當が附いて居る以上は、益以て分りが早い。君は直ぐ汽車で東京へ歸つて、兩家の自動車が今日どういふ方面に向つて行つたか、それを突留める必要がある。其上で又策は有らうぢやアないか」

「なア…程……………」

冒險男兒も將軍の策設計畫には感服せざるを得ない。

「百十二」

松倉團彌は烈火の如く成つて、東京へ飛込んだ。汽車も、電車も、何故今日は遅いといふ意氣組。

真先に本郷の大城邸を窺つた處が、今日は自動車は門から外へ出ない事が分つた。斯う成ると月野毛邸だが、其處まで出掛けて探るよりは、電話を掛けて問ふのが一番だと、早速自動電話を利用して——自動車の修繕を引受ける者の様な口吻を遣つて問合せた。處が昨日から自動車は本邸には無い。目黒の御別荘の方に廻して有るといふ。

さア締めたと早速別荘の方へ行つて見ると、門内で今、運転手が車臺の掃除をして居る處。外から今歸つて来たといふ事は、霜解路に残るタイヤの跡が何によりの證據。

いよゝ此邸内にお登女嬢を連込んだのであらうとは思つても、廣い邸内、迂濶に一人では飛込めぬ。

冒險男兒も斯う成ると考へざるを得ない。

「さア既う此場合、毒を以て毒を制するより他は無。非常手段を取るには、先づがんがら婆さんの智慧を借りるのが一番だ。物は當つて砕けるだ。斯ういふ事情からして斯くは是々と残らず打明けて掛つたなら、婆さん必ず力を添えて呉れるに相違あるまい。」

豊多摩から住原へ掛けてがんがら婆さんの勢力範圍。目黒などは別して手近の處、月野毛別邸へ入込む職人商人、其中に必ず婆さんの乾漢が有るだらうから、探りも出来れば引出しも成らうと、早速山の手電車で新宿へ行き、それから十二社のお辰の家へと駆付た。

幸ひに婆さんが在宅なので、面會の上、一部始終を話して。

「然ういふ譯ですから、前の事は水に流して、此所で一番お登女の爲に、一ト肌脱いては呉れませんか」と頼み入つた。

がんがら婆さん、驚きと悲しみと一緒にして。

「それア大變だ。一ト肌でも二肌でも素ツ裸体にでも成つて探しも仕よう。救ひ出しも仕ようが。待つてお呉れよ。探し出した處で、その飛行機とかに乗らすのは、妾が不承知だよ。そんな危ない事を彼の子に爲せるといふ法が有りますか。いくらお登女が御轉婆で木登りなんか平

氣で爲るからツて、空中へ登らせるのはイケないよ」と言出した。

「それが其の、國家の爲で。婦人で飛行機に乗るのは外國にも多くは無いので……」

「そんなお轉婆な事をして、お國の爲に成るのかえ」

「大成りで。實は斯ういふ場合なんで。近々外國人が日本で初めての遠乗をして威張らうといふので……日本には完全な飛行機が有るまい。のみ成らず夫に乗つて自由自在に空中を飛ぶ乗手が有るまいといふ、大自慢で羽田から向島まで、東京を足の下にして飛ばうといふのです。それに敗けない様に磯島の發明した飛行機へお登女さんに乗らして、西洋人の鼻を折らうといふのです」

「ふむ、西洋人が東京の上を飛んで威張るんだツて……それに敗けない様にお登女に飛せるんだツて。あツ然ういふ事なら分つたよ。妾の乾漢残らず引連れて、當日は手傳ひに出掛けて萬一お登女が敗けたら、其西洋人を生しちやア置かねえ、簀巻にして目黒川へ漬けて、アクの抜けた處で太鼓に張る」

「そんな事を仕なくツても宜しい。唯、月野毛別荘に居るか居ないか、突留めて、其上で救ひ出して下されば好いので」

「好いよ、分つたよ、妾も久し振でお登女に逢はれるんだ。お前も一緒にお出で。荏原の乾澁を総繰出した、なアに何萬坪有つても構はない。別荘の周囲を取巻いて、グズグズ言やアがると焼討にするまでよ」
婆さん大變な勢のである。

百十三

幸ひにして羽衣號は墜落しても大いなる破損を免れた。少修繕さへ爲れば用ゐられるので、引いて製作場まで歸つた。唯不思議なのは、何故に羽衣號が墜落したのか、其原因である。それは併しお登女が居ぬので分らぬ。

松倉の消息も未だ分らない。従つてお登女の生死など迎も知れ様が無い。

其處で荒根將軍と日立齋伯とは、一緒に歸京して、松倉に力を添へる事と成つた。後は磯島兄弟と小九郎との三人。急に寂しく成つた。

嗚呼、此處まで成功して來たのに、突然お登女さんが居なく成るとは、何んといふ不運だらう。不幸だらう。わざはひは何處まで附いて廻るのか。折角喜んだ効もなく忽ち此悲境。此後

如何に飛行機が成功しやうとも、お登女さんに萬一の事が有つたのでは、張合が無いとまで打萎れた。

否、それは一個人としての私情である。國家的事業に身を捧げた者は、そんな女々しい考へを出しては如何も成らぬ。少しも早く修繕をして、乗手が無くば自分が乗るとまで秀之助は憤して、毒男と小九郎とを相手に、早速修繕に掛つて、夜通しまでした。

幸ひにして翌日の午前十時頃には、大體元の如く成つたので、引出して滑走でも爲せて見ようとする時、何者が點けたか四方から燃えて來る野火事。

荒れに荒れたる相模ツ原の一部、枯草は人の丈より高い處がある、それが四方から舊競馬場を包んで焼けて來る。何者か、わざと放火したとしか考へられぬ。

「兄さん、大變だ。火に包圍されない中に、一方へ逃げませう」と毒男は叫んだ。

「我々は如何にでもして逃げられるが、此大きな飛行機を引いては、迎も逃げられない」と秀之助は途方に暮れた。

「然うですな。それでは我々三人で、此飛行機の周囲を防禦して居ませうか」

「水の乏しいのに防禦は迎も出來なからう。それに火の粉が降り飛んでは、翼は直に燃える。

翼が燃えれば他の部分も危い」

「然うですなア。おまけに風も大層加つた様ですが……何とか工風は無いもんでせうか」

「此上は僕が飛行機に乗つて、安全な位地まで飛去るのだ」

「それならば兄さん、私に乗らして下さい」

「いや、お前はいけない。僕が乗る」

「だつて兄さんが乗つて、萬一の事が有ると、取返しがつきませんよ」

「お前が乗つても萬一の事があれば、矢ッ張取返しがつきかねないか」

「なアに、私は死んでも損失は有りません。兄さんが死んでは、折角の發明が消えて了ひます

……」

「いや、お前……そんな事を言ふなツ。僅かの飛行が出来なくつて、乗手が失敗する

様な、そんな發明が何に成るかツ。自分の考案した飛行機に乗つて、それから落ちて死ねば、

つまり自分が失敗の罪を即座に引受けた事に成る」

『でも、飛行家と發明家とは、別問題です。兄さんに怪我さしちやア何にも成りません。私が

是非乗りませう』と取纏つて泣いて放さぬ。

「エッそんな事言つて、争つてる間に、段々火が近寄つて来て、飛行機どころか、人間の逃路まで無く成るツ。さッ放せツ」と秀之助は、強て振切つて乗らうと爲る。壽男はそれを引留め

「いや是非私が乗つて見ます」と言争つて居る處へ、小九郎が眞ッ黒に成つて走つて来た。

「工場の方へ火が附いたぞツ」

「百十四」

危機一髪に迫つて居る所へ、枯草の間を馬乗で駆け付けて来た一少女！
お登女が無事に歸つて来たのだ。

「あッお登女さん」と三人一時に叫んだ。

「後から皆んな来ます。妾だけ停車場前から馬に乗つて駆け付けたのよ。さア妾の来た方が未だ焼けて居ません。話は後でします。さア此馬を放して走らして、其後から三人お逃げなさい。

妾は飛行機に乗つて安全な方へ飛んで行きます。なアに今度は大丈夫です。昨日落ちたのは下から銃で翼を射抜かれたからなんです。今日の放火も敵の仕わざよ」と言ふ間には早や搭乗し

て、お登女の手は把手を取る。相變らずキビくした舉動。勇ましくとも勇ましい。

お登女は巧に羽衣號を操縦して安全なる位地に飛去つた。それは木枯天神の廣庭である。

此處へ前後して集合したのは、荒根將軍、日立畫伯、かんから婆、松倉冒險兒、秀之助兄弟に小九郎である。

皆はお登女と同時に汽車で来たので、其競馬場方面が野火事と知るや、お登女だけ先づ馬に乗じて走らしたのである。

此處で秀之助等三人は、お登女の其後に就て聞くを得た。

お登女は飛行中、原中に自働車が走るのを見たので、もしや月野毛公爵の方から様子を探りに来たのでは有るまいかと、少し降下した時に、突然下から發銃されて、翼を射抜かれた爲に機の平均を失つて墜落した。それ切り人事不省に成つて居る處を、自働車に擔ぎ載せられた。氣が着いた時には猿轡を嵌められ、手足を縛られて、其上を膝掛で覆はれて居た。

乗手は前崎他一名で、引入られたのが目黒の公爵別邸。

其處には公爵が居て、非常な侮辱を加へられ様として居る處へ、覆面の人が多勢來て救ひ出

して呉れたといふ。

これは松倉がかんから婆に依頼した結果なので、燒討までには至らなかつたが、別荘内は悉く荒され、前崎は半殺しの目に遭ひ、公爵も毆打されたといふ。併し自分の方にも暗い處が有るので、警察沙汰には成らなんだといふ。

荒根將軍は又別方面の報告を齎らした。それは、マルスの飛行がいよいよ明日開かれるといふのである。

豫定の如く池上の競馬場で、廣告的飛行の上、又翌日羽田運動場から、向島へ飛行するといふので、新聞などでは盛んに書立て、大變な人氣である。

併し心有る新聞では、嗚呼、飛行界其人無きか。我が帝都は外人の足下に蹂躪されん。何んぞ起つて彼より一步を先にせざるなど書いて居る。

それ等を將軍は語つて、秀之助等に聞かした。

お登女は、にっこり笑つて。

「好いわ、妾、翌々日は此羽衣號で、蹴飛して遣りますわ。なアに大丈夫ですよ」と十分自己の技倆を信する處が有る様だ。

「唯困るのは、出發點だ。向ふは羽田運動場から出るの、それまで此方は何處かに隠れて居なければ成らない。其場所が何處かに無いだらうか」と將軍が言つた時に、かんがら婆、鼻頭を横手で引ッ擦つて。

「大有りですよ。妾は羽田に海苔干場の地面を、可成り廣く持つて居ます。今は海苔の忙しい最中で、日に何千圓といふ金高の海苔を其處へ濱の者が乾すんですが、妾が一言云へば、二日でも三日でも籠垣を皆んな取拂ひます。其處へ飛行機を持込んで、籠垣で取圍んで隠して置んです」と言出した。

『でも、それでは大變な損金たらうが』と壽伯は心配する。

『なアに、國家の爲でさアね』と大カブレ。

「百十五」

池上競馬場に於ける米人マルスの飛行は、兎も角も成功した。波動飛行なども見事に遣つて退けた。爆彈投下などいふ子供だましの曲藝も演じられて大喝采。これでは翌日の大飛行が定めし壯快であらうといふ大人氣と成つた。

見物の中に混じて、成るべく人の注意を惹かぬ様にして、お登女も秀之助も其飛行振を見た。機はカーヂヌ式の復葉である。日本でこそ珍らしいが、外國の飛行界では、最早や舊式と目されて居る物。唯油断の成らぬのは、マルスの操縦法である。場敷を踏んで居るだけに、却々巧い。萬國飛行會で賞牌を得たといふだけの技倆は十分に見える。

此方は未だ數回の試乗を済ましたけである。それで勝たうといふのは、機の良好にも由らなければ成らぬが、寧ろ松倉の口癖なる膽力の養成ならざるを得ない。

お登女は併し心に恃む處があるか。微笑を洩らすのみであつた。

茲に最も厭な感じを生じたのは、蒼い顔をして甚だ氣餒の上らざる月野毛公爵の居る事である。毆打された爲であらう。

それよりも一層厭な感じを生じたのは、例の虚榮心満々たる大城香久子が、マルスの傍を殆ど離れないで、拙い英語で話して居る事だ。

餘り長く見て居て、此方が發見されては何にも成らぬと、好い加減にして引上げた。

羽田の海苔干場には既に飛行機が運ばれて居る。かんがら婆さんの乾兒が嚴重に警戒して居

るので、誰も籠垣の中を覗く事は出来ぬ。
一行は婆さんの世話で漁師の家を借りて其處に泊り込んで、明くる日の来るのを待った。

明くる日は幸ひに上天氣。では有るが、北方の風が却々強い。此方から向島には逆行する譯であるが、磯島式に取つては何んでも無い。逆風に向つて飛べるだけの装置が抜かりなく施してあるのだ。

出発點と到着點と介添人には兩方に分れて居る必用があるので、日立謙伯と松倉とがながら、婆さんが、羽田に留り、荒根將軍と秀之助兄弟と小九郎とは、向島に先發して待つ事にした。かゝる隠れたる飛行があらうとは知らず。昨日の評判に釣込まれて、見物は羽田に雲霞の如く集まつた。

豫定時間の十時といふに、マルスは運動場の中央に現はれた。『ん、マルスを以て迎へた。マルスは併し頗る苦い顔をして、風の模様を見て居た。』

『今日は恐らく飛ぶまい。翌日まで引ッ張るだらう。元來が興業師なんだからな』と消息に通じた一記者が密語した。

『左様、飛ぶとしても、申譯に富士の山を一週して止すだらう』と又一人が言ふ。

『えッ富士一週……』

『左様さ。稻荷の後にある人造の富士の山をさ』

『何んだ、君に釣られたのか。は、は、』と笑ひ出した。

果然、マルスは強風を氣にして、東京市横断の大飛行を躊躇した。

申譯的に二十米突位の高さで、運動場を三週して、地に降りた。

見物は、そろ／＼動搖し出した。

『何んだ、詐欺見たようだなア』

『此風に恐れるなんて、唐人は勇氣が無いなア』

『如何した。遣らんか』

口々に罵しり出した。

『百十六』

昨日は無料で見せたのであるから、何をしても見物は黙つて居たが、今日は高い入場料を取

つたのであるから、却々以て音無しくはして居らぬ。

其所でマルスも申譯に、何か多少變つた事を爲ねは成らなくなつた。

「貴女と一緒に空中旅行を試みませんか」とマルスは串談半分香久子に勧めた。

飛上りの香久子である。日本に於ける女子の飛行機乗り、イの一番は妾であるといふ輕薄な

ホコリが仕て見たさに、自分から便乗を言出さうかと思つて居た矢先である。

「是非一緒に乗らして頂戴！」と大喜びで答へた。

マルスはこれで見物の心をやわらげる手段に過ぎぬ。何も高く然うして長く飛ぶ必要は無い

ので、少しでも地を離れたら好いといふ、其つもりで香久子を前に乗らして後から操縦すべく

自分も乗つた。

心有る人は皆眉を擡めた。

今や滑走を始めんとする此時である。

空中に高きプロペラーの響き！

何物と見れば、意外、又更に飛行機の現出！

「あッ何者？」

「何式？」

「何處から？」

見物の眼は悉く之に集まつた。

機は單葉にして未だ曾て見た事の無い新式！乗る人は紺仕立の衣服に同じ紺の手甲脚絆、花

の如く美しい少女である。

「あれ！あれ！」と數萬の人は唯驚嘆の他はあらぬ。

突如として出現した飛行機は、怪少女を載せて、場の上を廻り出した。

これを見てはマルスも取けては居られぬ。急いで香久子に下車を迫つた。香久子は周章で降

り様として、轉落した。マルスは構はず、滑走から飛行に轉じた。香久子はお登女の顔を見て

全く生色を失つて了つた。

それを見て、前の飛行機は北に向つて海上の方に出た。

マルスも其後を追うて行かうとして逆風を喰つて、哀れ大失敗。中心を失つて海中へ眞逆様。

お登女は高らかに笑ひ捨て、方向舵を北方に取るや、全速力を出して東京の方へ！

群集は唯呆れて見送つて居る處、飛んで出たのは松倉團彌。

「諸君！今の磯島秀之助及び壽男といふ隠れたる發明家兄弟の手に由つて秘密に製造された飛行機だ。乗手は假の名を天津お登女といふ、最も快活な少女である。此少女の履歴に就て實に血の涙の話がある。これは向島の到着點に於て荒根少將閣下が演説せられる筈だ。我々の到達するまでは待つて居られる。諸君、これを聞かんと欲せば、急いで向島に走れッ」と呼ばつた。

羽衣號が向島に無事に到着したのは勿論である。東京市の横断は見事に成功した。いや未だ此以上の成功を見るのは容易なのであるが、今日は米人マルスの成し得ざつた事を成し遂げたに留めたのである。

お登女が下降した時に、待受けて居た秀之助が、眞先に強烈なる握手をした。

日立壽伯、松倉團彌、がんがら婆、其後から新聞記者及び多數の野次馬が向島に押寄せて來た時に、荒根將軍が壇上に立つて、大演説を試みた。

それは秀之助兄弟が發明の苦心、それから松倉團彌の友情に就ても委しく説いた。更に又お

お登女實は美登里子の身上に就て一層委しく説出して、其父の三穂原松作は決して非國民でないのみならず、軍事探偵として深く敵國に入り、軍國の爲に大いに盡したのであるが、詰らぬ間違ひから然ういふ風に誤解されたので、彼は生ける間に冤罪を雪ぎ得なかつた。遺子美登里はその雪冤がしたさに、一身を抛つて女ながら飛行乗の危険を敢てした。もし日本人にして、眞に非國民が有るとすれば、軍隊に送る糧食品に不正な事をして暴利を貪つた某某等の行動であるといふ風に、極めて痛烈に論辯し、其證據は近日著作を以て發表する。其中に明記すると附加へた。

然うして此演説が熱狂せる群衆の大喝采大歡呼を以て結了した時に、將軍は耻かしかる秀之助兄弟とお登女實は美登里とをさしまねいて、群衆に紹介した。

大々的歡呼が起つて暫しは鳴りも已まず。がんがら婆さんは嬉しさに踊つて居た。

砂金の谷は當分秘密に伏せて置く事にした。然うしてお登女と秀之助とは、世界に於ける飛行界の視察に近々洋行する事に極めた。

飛行の女終

歸つた上では是非結婚させると書伯や松倉が願いで居る。がんがら婆さんは、お登女を養女にするは諦めたが、親類のつもりで如何か永く交際つて、死水を取つて呉れと言つて居る。

いづれ山から鐵巨翁が出て来て荒根將軍と共に三穂原松作の雪冤録を出すだらう。それが出版されたら、大城銀十郎の社會上の位地は、全く奪はれ去るだらうと、松倉は大いに氣を吐いて居る。

或る新聞では、お登女嬢と秀之助君と結婚式を挙げた後で、飛行機に乗つて新婚旅行をするだらうなど想像説を事實らしく書立てた。これを見て二人は笑つて居た。

明治四十五年六月五日印刷
 明治四十五年六月十七日發行

○定價金八十錢

著者 江見水蔭

發行者 瀧川民治郎
東京市日本橋區馬喰町三丁目十四番地

印刷者 菅井十一郎
東京市神田區松住町五番地

不許複製
 複製

發行所 今古堂書店
東京市日本橋區馬喰町三丁目
 電話 東京四九六五九番
 電話 東京四九六五九番

目書行發堂古今

鐫德 木田 清秋 方聲 畫著 小說 結 婚 難	鐫廣 木津 清柳 方浪 畫著 小說 二 筋 道	鐫楓 木村 清居 方士 畫著 小說 橘 英 男	鐫黑 木法 清師 方畫 著 小說 想 夫 憐	鐫中 木村 清春 方雨 畫著 短篇 角 笛	原ヲ 抱ト 一庵 仲太 郎畫 翻譯 小說 聖 人 か 盜 賊 か
①定價金六 ②郵税金八 十 錢	①前編定價金六十 ②後編定價金六十 ③郵税金各八錢宛	①定價金四 ②郵税金八 十五 錢	①定價金四 ②郵税金六 十五 錢	①定價金六 ②郵税金八 十 錢	①前編定價金四十 ②後編定價金五十 ③郵税金各六錢宛

目書行發堂古今

鐫正 木宗 清白 方鳥 畫著 小說 誰 の 罪 業	鐫德 部田 密秋 也聲 畫著 小說 母 の 紀 念	鐫江 木見 清水 方蔭 畫著 小說 女 船 長	和廣 田津 英柳 作浪 畫著 小說 橫 戀 慕	鐫江 木見 清水 方蔭 畫著 小說 雲 か く れ	鐫橋 木本 清青 方雨 畫著 小說 愛 の 犧 牲
①定價金五 ②郵税金八 十 錢	①前編定價六十五 ②後編定價六十五 ③郵税金各八錢宛	①定價金五 ②郵税金八 十 錢	①前編定價六十五 ②後編定價六十五 ③郵税金各八錢宛	①定價金六 ②郵税金八 十 錢	①定價金六 ②郵税金八 十 錢

目書行發堂古今

柳川春葉著の家庭小説
齋藤松洲装釘
新夫婦
●前編定價金七十錢
●後編定價金七十錢
●郵稅金八錢

齋藤弔花著
理想小説
殘る光
●定價金六十五錢
●郵稅金八錢

塚原澁柿園著
歴史小説
天草一揆
●定價金六拾五錢
●郵稅金八錢

德田秋聲著
家庭小説
落し胤
●定價金六十五錢
●郵稅金八錢

江見清水方著
冒險小説
鹿島灘
●定價金七十錢
●郵稅金八錢

柳川春葉著の心影
●定價金七十錢
●郵稅金八錢

目書行發堂古今

生田葵山著
紅涙
●定價金八十錢
●郵稅金八錢

德田秋聲著
多者
●定價金八十錢
●郵稅金八錢

宮崎湖處子著
妻君の自白
●定價金四十錢
●郵稅金四錢

岡本綺堂著
維新前後
●定價金二十五錢
●郵稅金四錢

德川春葉作
不如歸
●定價金三十錢
●郵稅金四錢

柳川春葉著
雪子夫人
●定價金二十五錢
●郵稅金四錢

目書行發堂古今

大町桂月著 一枝の筆 ●●定價金四十五錢 ●●郵税金六	柳川春葉著 春葉集 ●●定價金四十八錢 ●●郵税金六	德田半古著 焰 ●●前編定價金五十錢 ●●後編定價金五十錢 ●●郵税金六	川上眉山著 新家 ●●定價金十五錢 ●●郵税金	廣津柳浪著 復讐 ●●前編定價金七十錢 ●●後編定價金七十錢 ●●郵税金八	德田秋聲著 女の秘密 ●●定價金六十五錢 ●●郵税金八
--------------------------------------	-------------------------------------	--	----------------------------------	---	--------------------------------------

目書行發堂古今

大町桂月著 閑日 ●●定價金四十五錢 ●●郵税金六	江見水方著 水中の結婚 ●●定價金五十錢 ●●郵税金八	小栗風葉著 春怨 ●●定價金七十錢 ●●郵税金八	中村春雨著 炬火 ●●定價金十二錢 ●●郵税金一	中村春雨著 犯さぬ罪 ●●定價金八十錢 ●●郵税金八	やなぎ生著 女の望 ●●定價金八十錢 ●●郵税金八
------------------------------------	--------------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------

目書行發堂古今

橋田山花助著 妻	德田秋聲作 正宗得三郎書作 同胞三人	眞山青果著 小杉未醒書著 南小泉村	柳川春葉作 河村清雄書作 操	眞山青果作 憂
●定價一圓五十錢 ●郵税金十二錢	●定價金十二錢 ●郵税金十一錢	●定價金八十五錢 ●郵税金八錢	●定價金一圓四十錢 ●郵税金十二錢	●定價金九錢 ●郵税金八錢

目書行發堂古今

柳川春葉作 中澤弘光書作 女四人	無名氏作 山本研山書作 續想夫憐	江見水蔭作 織田東禹書作 荒浪	山田美妙作 平重衡	和田花翁作 和田英作書作 緣	中村星湖作 本多程堂書作 影
●定價金一圓十錢 ●郵税金十二錢	●定價金四十五錢 ●郵税金八錢	●定價金七十錢 ●郵税金八錢	●定價金一圓卅錢 ●郵税金十二錢	●定價金一圓半錢 ●郵税金十二錢	●定價金十一錢 ●郵税金十二錢

目 書 行 發 堂 古 今

正宗得三郎齋

木

像

●●定價 金十二錢
●●郵稅 金一錢

文學博士 久米邦武著

裏面りよ見るた日本歴史

●●定價 金十二錢
●●郵稅 金一錢

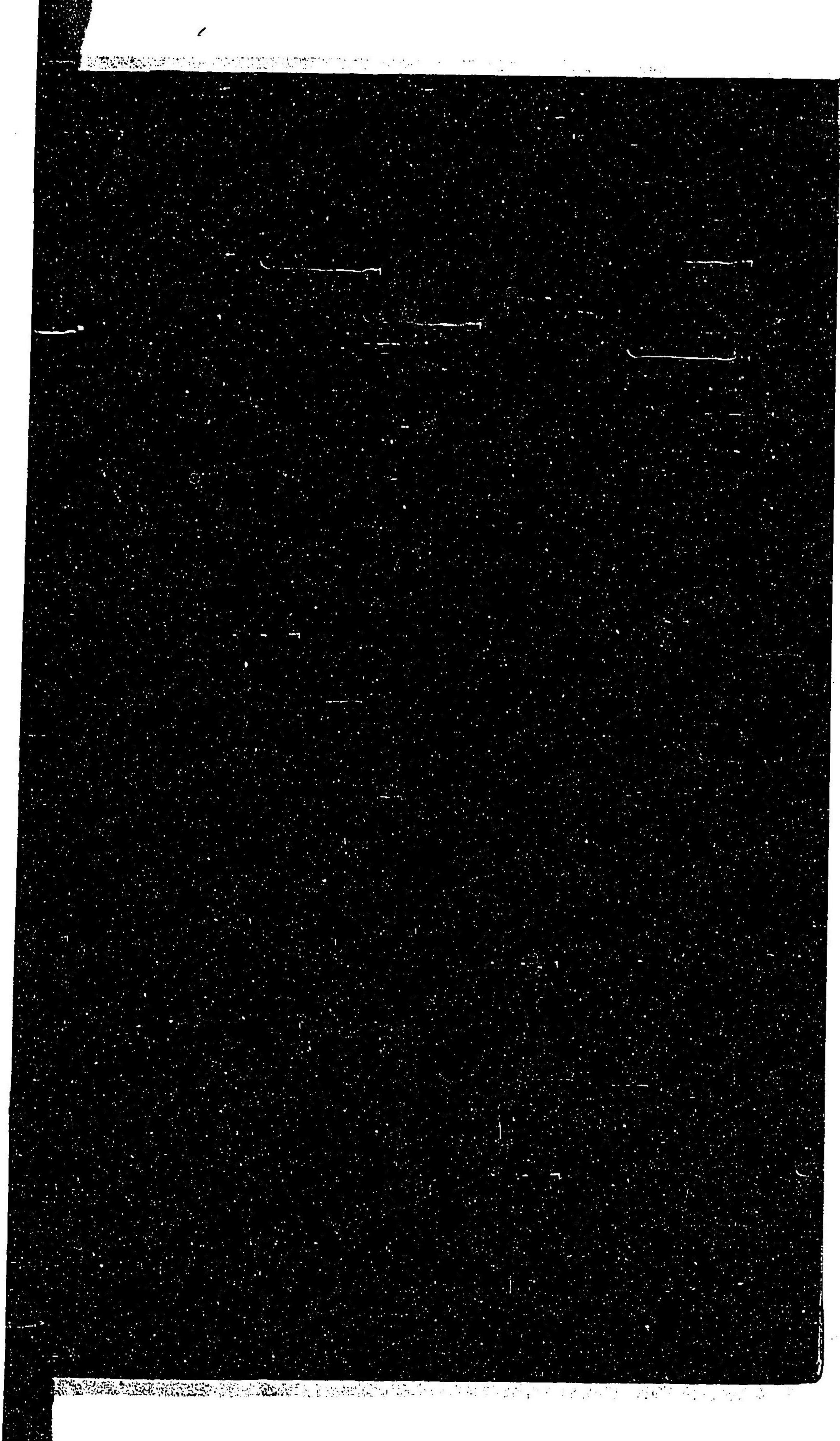
柳川春葉齋 本多

姉

妹

●●定價 金十二錢
●●郵稅 金一錢

329
142



329
142

095068-000-9

329-142

飛行の女

江見 水蔭/著

M45

DBQ-2668



96-10-23